

---

# 幼稚園児も大変なんです

姉子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幼稚園児も大変なんです

### 【Nコード】

N0103E

### 【作者名】

姉子

### 【あらすじ】

最近の幼稚園児は大変なんです。大人が思ってるほど生易しい世界ではないんです。きりちゃん、5歳。今日もがんばって生きてます！

## 幼稚園児の兄

幼稚園児の朝は忙しい。着替えもしなくちゃいけないし、顔を洗って丁寧に髪を整える。最強悩殺セクシー笑顔の練習をして、ご飯を食べる。

そのご飯がくつそまずいの、信じられない。育ち盛りの娘の目の前に、こんな炭化したもの出すし。  
死ねって言うの？5歳にしてこの世を去れって言うの？！

「きりちゃん、駄々漏れだよ。お兄ちゃんショックでたまらないよ」  
「あたしもたまないわよ、こんなもの人間の食べ物じゃないわ。  
廃棄物よ！」

この顔面から汚物を垂れ流している、汚物男は一応あたしの兄。お母さんもお父さんも死んじゃって、あたしを育ててくれてる人。お母さんたちも子どもつくるんなら成人するまでしっかりしてほしかったわ。

「きりちゃん、今日お遊戯会の練習するんでしょ？見に行つていいかな？」

「何言つてんのよ、本番前に見にくる馬鹿がどこにいのよ。それよりさつさと働いてあたしの教育費を稼ぐことね！」

あ、そろそろ時間だわ。この時間のないときに兄貴はまた・・・汚いわね、粗大ごみに出したいわ。

「きりちゃん、お兄ちゃんはきりちゃんをお嫁になんか出したいくないよ・・・」

「お兄ちゃん本当に社会人なの？あたし妹なんて恥ずかしくて人前

「で言えない」

迎えのバスが来るって言うのにこの男。いつまでもうだうだ、本当にはっ倒したいわ。でもそんな余裕本当にないわね、こうなったら。

「お兄ちゃん、きり早く幼稚園に行きたいな。お遊戯いっぱい練習したいな、お兄ちゃんにほめてもらいたいから」

いつも幼稚園で男の子にお願い事するときみたいに、ちょっとつむき加減で目を十分に潤し見上げる。どうしても目が乾いてるときはしょうがなく目薬は使うけどね。でも私の演技は完璧だからほとんど目薬なんて使わない！

「で、でも！そんなにうまくやって男に惚れられたりしたらどうする？！お兄ちゃん泣いてしまうよ！相手をたこ殴りにしてしまうよ！！！」

ちっ、めんどくさい。もうあれしかない。切り札をこうも易々とだしてると女の価値は下がる気がするわ。

「お兄ちゃん・・・あたしお兄ちゃんが一番大好きだよ」

「きっ、きり・・・きり、きりいい！！！」

よし、今日もぎりぎり間に合うわね。

## 幼稚園児の遊び

「きりちゃん、積み木で遊ぼうよ。きりちゃんのために部屋中のかき集めたんだ」

「何言ってるんだ。そんな角が丸くなって薄汚れた木屑なんてきりちゃんに触らないよ。きりちゃん、僕の家からフランス人形持ってきたんだ、一緒に遊ぼう」

「馬鹿言っつなよ、そんな呪われた人形きりちゃんに失礼だろうが。この身のほど知らず」

「お前こそこんな小さな部屋から集めた木屑なんてたいしたことないだろうが、イタリア製の家具のひとつでも持ってるこいよ」

はあ、今日もまたあたしを巡っての争い。毎日あきないわね、この凡人どもは。だから嫌なのよね、同年代って。子供っぽいならありやしない。

大体積み木って、建築家にでもなりたいの？ 積んでは壊し、積んでは壊し、むなしいわ。そんな無限ループにかかわってるほどお人よしじゃないし、暇なんてないわ。

それに人形って、フランス人形って。こんな平凡な幼稚園にそれはあまりにも不釣り合いだってわからないのかしら？ それに無抵抗な相手を弄ぶなんて非道行為、世間の大人が許してもあたしは許さないわよ。

「きりちゃんどっちと遊ぶ？！」

まだやってたのね、気づかなかったわ。よほど暇なのね。しょうがない、幼稚園児の最新の遊びを教えてあげましょう。

「おままごとするわよ」

設定はどこにでもあるようなもの。建築ぼつやはあたしの夫。フラインスぼつやは人妻のあたしに一目ぼれする若社長。

「奥さん、好きだ！君のためならいくらでも払える！」

「だめだめ！お金で物事解決できると思ったら大間違いよ、命を差し出す！ぐらい言わないと」

「は、はい！奥さん、好きだ！君のためなら命も惜しまない！」

「いいわよ、その調子。次、夫！たまたま仕事が早く終わって帰宅すると妻が知らない男に迫られていた！」

「おい、お前！何してんだ！」

「あゝ全然だめ、何してんだって愚問でしょ？男と女がすることなんて限られてるじゃない。もっとこう、激しい怒りをあらわにして！妻が襲われてんのよ？あたしのこと愛してんでしょ！」

「す、すみません！こ、こるあああ！おどれわしの女に何しとんじやあー！！」

「いいわ！その巻き舌最高よ！」

世間の昼はすごいよ。幼稚園児のままごとも進化しなくちゃね。いつでも流行を気にしてないと、すぐに老けちゃうわよ。

「きりちゃんたちーそろそろ時間よー」

そろそろお開きのようね、しかたない。

「今日はここまで！」

「はい！ありがとうございました！」

明日からはもっと難易度あげないと。人生修羅場なんていくつもあ

るんだから、ちゃんと練習しないとね。

「きりちゃん、今日も幼稚園楽しかった？」

今日はカレー。兄貴はカレーだけはおいしい。他のものは豚のえさにもなりやしない。

「楽しかったよ、友達に恋愛のなんたるかを教えてあげた」

「さすがきりちゃん、大好きだよ」

「あたしはさほどお兄ちゃんのこととは好きではないわ」

「き、きりちゃん・・・!!」

幼稚園児も疲れるわ。

## 幼稚園児のお遊戯会

お遊戯会、それは子どもメインというか大人の戦場のひとつ。運動会が第二次世界大戦とすれば、さしずめお遊戯会は応仁の乱と言ったところかしら。時代軸が違うのはおいというて、大人たちの戦いは場所取りから始まる。

真ん中の一番前がS席とすれば、後ろから2、3人前の左はC席。前は決して見えない。立ち上げれば苦情。上手ははるか彼方。あたしの兄貴はもちろん、S席。幼稚園の迷惑も考えないで、開場1時間も前から騒いでいた始末。

「きりいいい！頑張れー！お兄ちゃん見てるぞー！写真も撮ってるぞー！ビデオももちろんだー！きりー！！」

数多の敵を退け手にした場所。どうやら兄は全開のようね。恥ずかしい、みつともない。身内であることを知られたくないわ。でも無理ね、しっかり名を呼んでいる。

まだ始まってもないのに。ナレーションの先生も言い出そうにも言えない。出番待ちのあたしの方をちらちら見ている。

「大丈夫です、先生。馬鹿は1回死んでも直りませんから。何回でもチャレンジしてください」

「きりちゃん、先生に何させる気？！」

「冗談ですよ、しゃべっちゃえばこつちのもんです。多分」

「多分？！そんな曖昧な！」

「ほら先生、暴動が起こる前に！」

急かされた先生はいきなり

「な、なんと！白雪姫が食べたのは毒りんごだったのです！」

「先生！まだ誰も登場してません！」

建築ぼうや、ナイスよ。つつこみ度プラス3と言ったところかしら。

「そ、そうね、まずは登場させないとね！みんな！さあ、早く出て！」

「先生！それじゃファイナーレです！」

フランスぼうやもやるわね、プラス4と言ったところね。

「ああ！じゃあまず木役と花役の子たち出て！」

「先生！普通木や花は大地にしっかりと根付いているものです！」

建築ぼうや、かしこさプラス2よ。でもこんな状況だからちよつとは不可思議があってもいいのよ。

「魔女！魔女出てみて！魔法でこの状況をなんとかして！」

「先生！他力本願はよくないです！」

フランスぼうや、正義感プラス1ね。でもね、見てごらんなさい。先生のあの汗、尋常じゃないわよ。もうちよつと思いやりを持ってもいいと思うわよ。

もうだめね、ここはあたしがやるしかないわね。

「出ます」

「きりちゃん？！」

もちろんあたしは主役の白雪姫。木とか花とか小人なんてやってられないわよ。

「うおおおおお！きりちゃー！ーん！！」

フラッシュの嵐。連写してるの？ビデオあるならそれでいいじゃない。本当にどうしようもない変態ね。でも今はその変態にかまってる暇はないのよ。この混乱をなんとかしなくちゃ。

「おお、神よ！どうして私は白雪姫なの！」

名女優と言われたあたしの演技をとくと味わうがいいわ！

「美しすぎるからと言って、猟師に私の肝臓を持ってこさせるなんて！でも優しい猟師は代わりにいのししを持っていつてくれたわ、ありがとう！それから7人の男どもたちとの生活！耐えられなかったわ！なぜ私があんな薄汚いやつらの世話なんかしないといけないのよ！それから2度も3度も殺されそうになって！毒入りりんご食べて眠つてるときにどっかの王子は私を自分家に持って帰ろうとするし！王子の手下はやつあたりで私を殴るし！まあおかげで助かったけどね！お母様は焼けた鉄の靴を履いて、踊り狂って死んだからいいものの！」

さあ、ラストよ！

「こんな人生あんまりじゃない！！」

・・・あれ？こぶしを握り締めて、片足ついて派手に終わらせたのに。拍手どころか物音ひとつしないわ。

「ブ」

兄貴？こんなときにおなら？本当恥ずかしい変態ね。

「ブラボオオオ！！」

兄貴だけじゃなく会場にいる人みんながスタンディングオベーション。

「きりちゃん！最高だよ！感動した！白雪姫の真の魂の声が聞こえたよ！いや、響いてきたよ！！」

兄貴は号泣、先生は台本を投げ出し建築ぼうやとフランスぼうやと抱擁、他の園児は胴上げのやりあい、保護者はあたしにサインを求めてくる。当然の結果ね。

今年のお遊戯会もうまくいったわ。

## 幼稚園児の戦い

今私は最大の危機を迎えている。そう、私はフランスぼうやに食事に誘われて玄関を出ること3歩目。あたしは動けなくなっている。

原因はわかっている。目の前の敵、真っ黒で細長い体、ギラギラした目、今にも肉を食いちぎらんとせん牙、ぴんと立ち周囲の物音ひとつ逃すことのない耳、何よりもそのおしりで怪しく動く尻尾！

「にゃー」

猫！！

「な、何しようっていうのよ。一歩でも動いてごらん、二度と太陽なんて拝ませないわよ！」

事件は1年前、ある夏の日。あたしは兄貴とのプール帰り。ちよつとはしゃぎすぎて歩くのも必死だったわ。油断していたと言えばそうなんだけど。でも！卑怯じゃない！お互いフェアじゃなくちゃ！戦いとは神聖なるもの！それをいとも簡単にやつは！

「今度は・・・今度こそは前みたいに簡単に横切らせたりしないわよ！」

このあたしを横切った！横切りやがったのよ！許せない、許せないんだから！

それからというものの、あたしには不幸が降りかかりっぱなし。兄貴は変態に磨きをかけ、身長はそこそこで体重は増え続ける！最近な

なんて目じりのあたりがやばいのよ！

「ふっ・・・どっからでもかかってきなさいよ！この１年間、血の滲むような特訓の成果！あんたに見せてあげるわよ！ほら、どうしたのよ！今さら怖気づいたなんて言わせないんだから！」

もちろん特訓は反復横飛び。毎日２０分はやってたのよ。おかげで誰よりも横移動が速くなったわ。そこだけは感謝してあげる！

「ほら、かかってきなさいよおおー！」

積年の恨み、今ここで晴らしてやるわ！

「あ、きりちゃんはどうしたの？あゝ猫か、はいはい今どけたげるー」

・・・え？

「どっか行くの？早く帰ってこないとお兄ちゃん搜索届出しちゃうからー！」

ちょ、ちょっと？

「んじゃ猫ちゃんはお家にお帰り、きりちゃんも１分１秒でも早く帰ってきてね。気をつけて行ってらっしゃーい」

むなしく響くドアの閉まる音。静かに立ち去る我が宿敵。戦いは終わったのだ。今まさに、あたしとあいつの仁義なき戦いは第三者の介入によって、しかも変態シスコンによって終結したのだ。

「・・・人生って・・・何・・・？」

あたしは今日、本当の敵は兄貴なんだと確認した。

## 幼稚園児の歌

今は歌の時間。お題は「ぞうさん」なのよ。

「ぞーさん、ぞーさん、おーはながながいのねーそーよ、かーさん  
もーなーがいのよー」

確認すること？母親の鼻が長いという特徴があれば、少なからず遺伝するに決まってるじゃない。それとも鼻が高いのをちよっとお茶目に遠慮気味に言ってみただけかしら？そしたらよけい嫌味な親子ね。

きつとこの母親はPTAの集まりでも「私最近ハワイに行ってきたのーたいしたことないんですけどーおほほー」なんて言っちゃってるやかましい人なんだわ。ハワイなんて最近だったらそう珍しくもないのに。本当、たいしたことないわね。行くんだったらサン・マリノ共和国ぐらい行きなさいってのよ。

「うーみーはーひろいーなーおーきーなー、つーきーがーのぼるー  
しーひがしーずーむー」

次は「うみ」？またメジャーすぎるメジャーに手を出したのね。

今さらだつてのよ。月が昇ぼって太陽が沈むなんて常識よ。馬鹿にしてんの？潮の満引きが月と太陽の引力が関係してるってこともあ  
たし知ってるぐらいよ。

大体ね、最近の若者を大人は馬鹿にしすぎよ。交通事故起こしたり、  
交通規則を守らないのは最近の若者？いい加減にしてほしいわね。

道路を我が物顔で横断してんのはどっちよ。世の中のありとあらゆる自動車が年寄り優先だと思ったたら大間違いよ。それに自転車、ふらふらするぐらいなら降りなさいよ。でもだからって突然降りられたりしたら迷惑よ。

「そおだゝおそれないでーみーんなゝのために、あいとーゆうきだけーがとーもだちさゝ」

「アンパンマンマーチ」・・・これは聞けば聞くほどむなしくなるわよ。

アンパンマンマーチって言うぐらいだからアンパンマン個人の歌なんだでしょ？かわいそうよね、本当に。みんなのためにいけ！って・個人攻撃もいいところよ。アンパンマンが必死になるときに他の人はまったりお茶でもしてんのかしら？酷よね、あの世界。アンパンマンもアンパンマンよ、自己犠牲しすぎじゃない。もっと協力を募ったらいいのに。それともパンはパンなりのプライドでもあるのかしら？

でもあたしたちの世界とアンパンマンの世界もそう変わらないのかもね。愛と勇気だけが友達、支え、生きる希望、なんて人いると思うし、そう思わざるえない人もきつといるんだわ。愛なんて脆く儚いものだし、勇気なんてどこで発揮するのよ。甘いよ、世の中愛で米は食えないのよ！勇気だけじゃ金融機関からは逃れられないのよ！

「きりちゃん、お願いだからお歌を歌ってーじゃないと先生どうすればいいかわからないわー！これは家庭訪問するべきなのー？！悩みがあるなら先生に言ってちょうだいー！！」

あ、  
今は歌の時間だったわ。

## 幼稚園児の墓参り

今日はね、特別な日。お母さんとお父さんが、あたしと兄貴を残してさっさとあの世に行っちゃった日。

「きりちゃん、準備はできた？」

「乙女の着替えを覗くなんてとんだ不屈き者ね。義務教育はちゃんと受けたのかしら？」

「ごめんきりちゃん！お願いだから嫌わないで！お兄ちゃん廃人にも簡単になる自信があるから！」

「だったら一刻も早くこの部屋から立ち去ることね、あと3秒しかないわよ」

「3秒？！時間制限ありだったのか！！」

変態シスコン兄貴のおかげで疲れるけど退屈はしない。きっと兄貴は兄貴で頑張ってるし、あたしの知らないところで苦労してるんだと思う。兄貴がいなかったらあたしきつと施設行きだったわ。なんせお母さんたち駆け落ちだったらしいから。

感謝してるの、本当は。世の中両親いても不幸な子どももいるし。だから不幸だなんて思わないわ。でもね、あたしは本当にここにいるのかって思っちゃうわけ。

「きりちゃん、そろそろ行くよー」

「わかった！すぐ行くー」

だって正直言つて兄貴はかっこいいの、黙っていればの話だけど。だってこのあたしの兄貴よ？性格はともかく容姿は整ってるわけ。背も高いし、若いのに主任だって聞いた。こりゃモテるでしょ？モ

テなきやおかしいでしょ？

それなのにまだ幼稚園に通うあたしがいる。こんなじゃお付き合いとか断ってるだろうし、デートとかもしてないんだわ。今が盛りなのに、もったいない。それもこれもあたしがいるせいなの。わかつてるの、わかつてるんだけどあたしじゃ何もできないのよ。

「きりちゃん？どっか具合悪い？病院行く？いつそのこと検査入院してみる？」

「冗談は1日1回にして、終いにやあたしもどうなるかわからないわよ」

「ご、ごめん！お願いだから嫌わなideてくださいー！」

「わかつたならいいわ」

「・・・でも本当に具合が悪くなったらちゃんと言うんだよ？きりちゃんに何かあったらお兄ちゃん発狂しちゃうから」

「言霊信じてるの、二度と言わないで」

「ご、ご、ごめんー！！」

こんな変態だけど、ちゃんと優しいの。あたしに何かあったら迷惑なほど心配してくれて、助けてくれる。

「でも・・・ありがとう」

「き、きりちゃん・・・お兄ちゃん感涙で前が見えない・・・！」

「やめてよ！お兄ちゃんと心中なんてまっぴらよ！」

早く大人になって、お兄ちゃんを解放してあげないといけないの。もうあたしなんかにかまわないで、自由に生きてほしい。好きなこととしてほしいの。

「なんとか無事に着いたねー」

「本当に、何回中央線越えたことか！対向車の人もすごい顔してたわよ！」

「ごめんって！本当にごめんなさい！！」

「わかればいいわよ」

お母さん、お父さん、あたしを早く大人にして。

「母さん、父さん、きりちゃんはいいい子で元気にちゃんと大きくなつてます。最近は本当にかわいくてかわいくてたまりません。嫁に行くことなんか考えただけで相手の男を殴り倒してしまいそうです」「相手はまだいないのよ、早とちりもいいところよ」

「まだ！まだって将来はいるってのか？！」

「当たり前じゃない、あたしが一生をお兄ちゃんと添い遂げるわけないじゃない」

「えー・・・」

「えーじゃないわよ」

そして兄貴にお嫁さんをあげてください。このままじゃ独身で終わります。孤独死は辛いです。

「んじやなるべくきりちゃんが大人にならないようにお願いしよう」

「やめてよ！言霊！」

「だって・・・」

「だってじゃないわよ！何考えてんのよ！言霊なめてたら痛い目にあうわよ！」

「そんな必死に・・・そんなにお兄ちゃんのこと嫌い？！お兄ちゃんショック！！」

「必死にもなるわよ！」

もうやめてよ、幸せになつてよ。あたしの犠牲になんかならないで

よ！

「きりちゃん・・・？」

「お兄ちゃんは！幸せに！し、幸せにならずにちゃいけないの！あたしに付きつ切りじゃだめなのよ！お、お嫁さんもらって、ご飯つ、作ってもらって、豪邸建てて、のんび、びりするの！」

あたしお兄ちゃんの幸せ踏み台にして生きてるの。あたし嫌なのよ、嫌なの。大好きな人がこんな目にあうの。

「きりちゃん・・・おいで」

行っちゃだめよ、あたしお兄ちゃん離れするんだから！

「遠慮しなくていいよ。ごめんね、きり」

笑ってんじゃないわよ！腕のばすんじゃないわよ！

「ずっと辛かったんだね。気づいてあげられなくてごめんね」

あーあ、だめだわあたし。つついお兄ちゃんの腕の中じゃない。久しぶりすぎて涙とまんない。

「お兄ちゃんね、ずっと幸せだったよ。それはこれからもだ。きりちゃんがいる限りお兄ちゃんは幸せいっぱいだよ」

「そ、それじゃ、お兄ちゃん、いつ、一生独身・・・！」

「あははー独身貴族もなかなかだよ」

馬鹿言ってんじゃないわよ！病気とかしたらどーすんのよ！本当馬鹿で変態でシスコンなんだから！

「お兄ちゃんね、きりちゃんがいて本当によかった。お兄ちゃん一人だったらきつとこんなに笑って暮らせなかった。きりちゃんのおかげだよ、本当にありがとう。だから泣かないで？お兄ちゃんきりちゃんの笑顔が一番好きなんだ」

「へ、変態・・・」

「あははゝ変態って言われちゃったー」

本当救いようがない変態兄貴ね、当分お嫁には行けないわ。

「しよ、しょうがないから当分一緒にいてあげるわよ！」

「本当?!んじゃずつとねゝ」

「当分つつたでしよ!だれがずつとだつて言つたのよ!」

「えー・・・」

「えーじゃない!」

お兄ちゃんの笑顔好きだよ。きつとこれからもいろいろあるけど、ずっと大好きだよ。今までありがとう、これからもよろしくね。あたしがお母さんたちの分もいっぱい笑わせてあげるから。

「きりちゃん大好きだよー」

「はいはい、あたしもよ」

「本当?!うわ・・・お兄ちゃん感涙で前が見えない!!」

「そのネタはもうだめね、死んでる」

「そ、そんなあ」

あたしも相当ブラコンのようね。

## 幼稚園児の観察

「きりちゃん、何見てるのー？」

あまり周りに興味を示さないあたしも、これはっかりは見ずにはいられない。何これ、なんなの？しゅわしゅわでもこもこでかちかちで木に引っ付いてるわ。

「あつ、カマキリの卵だ！」

「カマキリの？これが？」

建築ぼうやもなかなかの博識ね。こんなのにカマキリの次世代が詰まってるのね。

「これは？」

ぽっかりあいた穴。小さいけど、こんな所にあるなんてきつと深い意味があるんだわ。

「これアリの巣じゃないかなあ？」

しばらく見ていると中から確かにアリが出てきて、外にいたアリが中に入っっていつてる。

「ああ！きりちゃんそれはあんまりだよ！」

ためしにそこら辺にあった枝を突っ込んで塞いでみたら、アリは面白いくらいに焦ってる。枝を上ったり下りたりして、楽しいったらありゃしない。アリたち、私に逆らってごらん。一瞬にしてあんた

たちの地底帝国を破壊しつくしてやるわよ！

「きりちゃん、アリに何の恨みがあるの？！」

「何もないわよ。そうね、あえて言うなら純粹な破壊心？」

「僕らの心にはそんな残酷なものはないと信じたいよ！」

「馬鹿ね、子どもほど残酷なもんはないわ。無邪気と見せかけて、その心は小さな悪意でいっぱいなのよ」

「きりちゃん！僕ら知らず知らずのうちに犯罪者にでもなってるの？！」

「よく考えてみなさいよ。この間も面白がってトンボの羽をむしりとったじゃない？でもあたしたちはただトンボに羽がなかったらどうなるんだろうって、ちよつと不思議に思っただけじゃない。そのときあたしたちはトンボをいじめてやろうとか、殺してやろうなんて思ってたでしょ」

建築ばうや、目にいっぱい涙ためてるじゃない。でもちゃんと言わなきゃね、今後のためにも。

「でもトンボにはそんな関係ないわけじゃない？突然つかまえられて、突然大切な体の一部を奪われる。でもトンボはしゃべったりしない、だからあたしたちも絶対にやめたりしなかった。そしてまぬけな格好にされて、飽きたらポイよ。その後のトンボの生活なんて考えずに。その一瞬の興味のために多くの命を無駄に無くしてる。これがあたしたち、子どもなのよ」

「な、ならどうして、アリの巣に、ひ、ひどいことするの？」

もう号泣ね、まるであたしがいじめてるみたいじゃない。

「決まってるでしょ、子どもだから」

「え？」

「子どもだから許されてるのよ。大人になってまでアリの巣に枝突っ込んで遊んでたりしたら、警察どころかそれこそ病院行きね」

「で、でも、かわいそう、だよ」

「そうね、でもそうやって命の大切さを学んでいくのよ。どんなに小さな生き物にもあたしたちと同じ命があるの。だからむやみに殺しちゃだめなのよ」

「う、うん!!」

これでまたひとつ大人になったわね、建築ばうや。

「でもきりちゃん、そこまでわかってるのにどうしてアリを執拗にいじめるの？」

「楽しいから」

子供のうちはね、いろいろ経験が必要なの。物より思い出よ。

「きりちゃん、お風呂に入るよ」

「はい」

そう、いろいろやってみなくちゃね。

「きひいいい?!き、きりちゃん何してるの?!」

「これ何かなーと思って」

兄貴にあって、あたしにないもの。しっかり調べてみる必要があるわね。幼稚園児も勉強することがいっぱいだよ。

## 幼稚園児の工作

今日の前にあるのはセロハンテープ、ボンド、はさみ、お菓子の空き箱、トイレットペーパーの芯、折り紙、色画用紙。

「みんなー自分のほしい家を作ってみましょうー」

「はい」

こんなごみ同然のものであたしの理想の家が作れると思ってんの？先生も浅はかね。でもまあ、先生も最近苦労が多いからここは協力的にやってあげるわよ。

「きりちゃん、僕の家でつかいお風呂があるんだ！これでどんなに太ってる人がいても大丈夫だよ！」

あたしの家系に肥満はいないのよ、それとも将来あたしが太るとでも言いたいのかしら？

「僕の家なんて家の6割がトイレだよ！きりちゃん、僕の家の方がいいよね?!」

おかしいでしょ、それはおかしいでしょ。家と言うより公衆便所に近いわよ。

「僕の家なんて8割が玄関だよ！」

オープンすぎるでしょ、もういつそのことそんな家リフォームしてカフェかなんかにしたほうがいいわよ。

「あたしの家なんて窓が5つもあるんだよ！」

結構普通ね、むしろ少ないぐらいね。

「まあ、窓しかないんだけどね！」

10割窓だったのね。だめよ、それじゃプライバシーもあつたもんじゃないわ。

「あたしなんて庭に米植えてるんだから！」

農家？あなたの家は農家なの？でも庭に植えてもたいした収穫はないわ、経営破綻が目に見えてるわよ。

「俺ん家がーちゃんとーちゃんのじーちゃんとばーちゃんがいる！5人！」

1人多いわよ、普通いても最高4人よ。複雑な家庭環境ね、きつと近いうちに問題が起こるわよ。

「僕ん家イリオモテヤマネコがいるんだから！」

それは特別天然記念物よ、あつという間に通報されて路頭を彷徨うことになりかねないわよ。

「きりちゃんはどうな家がいいの？！」

そうね、語ってあげましょうか。あたしの理想を。

「アルハンブラ宮殿」

「何それ?!どこにあるの?!」

「スペイン」

「すげえ!きりちゃん海外進出だ!」

「当然よ、あたしが日本という小さな国に納まるはずないわ」

「で、それどんな家?!」

「・・・それは行ってみないとわからないでしょ」

「やっぱ人生最大の大きな買い物は見て確かめないとね!」

そつよ、ちゃんと確かめなくちゃ!騙されたって泣き寝入りなんてできないんだから!

「あゝあれ?世界遺産だよ?住む?きりちゃんならきつと住めるよー多分」

「・・・そう」

「どうしたのー?住めるよーきつと!・・・多分!」

「もう黙ってよ、馬鹿にしてんの?してんのね、このあたしを。もういいわ、こっちにも考えがあるわよ、このあばずれ!」

「き、きりちゃんそんな言葉どこで覚えたの?!」

幼稚園児もいつか世界遺産に住めるわよ!

## 幼稚園児の正義

「こるあ、早く持ってこいっつってんだよお」

この真昼間の住宅街に響くゲスな声、いったい誰なのよ。近隣住民の迷惑ぐらい考えなさいってのよ。

「ご、ごめんなさい、もう僕のなくて」

あら？この聞き覚えのある・・・もしかしてフランスぼうや？

「親の財布から取ってこいよお！それぐらい頭使え、このガキがある！」

は・・・今ので全部わかったわ。どうやらフランスぼうやはかつてあげのターゲットになってるようね。運が悪いのね。

運は大切よ、お金があっても運がなかったらこの先何やっても失敗するわよ。立ち上げた会社なんて1週間で倒産するわよ。連帯保証人にされて本人に逃げられるわよ。握手するときに画鋏仕込まれるわよ。

「そ、そんなことできな」

「やれっつってんだろがぁ！！」

しかたないわね、フランスぼうや。これは貸りにしといてあげるわ。

「ちよつとそこの語尾流し放題さん」

「きりちゃん?!」

いつものフランスばうやとは思えない顔面ね、まあ子どもだからしょうがないけど。でも幼少時の記憶をなめてたらだめよ。あたしなんて今のあなたの顔面、20年は忘れないわよ。

「なんだお前え、ふざけてんのかぁ！ぶっ飛ばすぞぉ！！」

迫力に欠ける台詞ね・・・顔も普通だし。斜めに走る物凄い傷跡とか、耳たぶあるのかないのかわからないぐらいのピアスホールとか、カラコンとか眼帯とかしないのかしら？

「人からお金盗ったらだめだって教えてもらいませんでしたか？あたし5歳だけどそれぐらい知ってるわよ。ランドセル背負ってるくせにとんだ非常識者なのね」

「おまつ、なめてんのかぁ！」

あ、初めて語尾が歯切れよかったわ。一瞬だけど。それにしても・・・小学生の分際でなかなかの素行の悪さね。先行きが心配よ。

こういった人間が社会に出るとんでもないのよ。世の中巻き舌で渡れると思ってるのよ、きつと。甘いよ。裏世界じゃあたしたちの知らない間に、小指をあげたりもらったりしてんのよ。円の代わりに小指ってなんてハードなのかしら。あたし絶対表の世界で悠悠自適に生活してやるわ。

「ぶん殴るぞお、こるぁ！」

「殴ってみなさいよ。あんたあたしの兄貴、瞬殺の狼にその名のとおり瞬殺されるわよ」

「ああ?!」

「あたしの兄貴はね、変態なの。シスコンなの、手のつけようのな

い馬鹿者なのよ！」

「きりちゃん、瞬殺の狼の名が廃るよ！」

すっかり元気ね、フランスぼうや。セコンドのつもり？容赦なくリ  
ングへ放り投げてやるわよ。

「だけどね、あの動き。只者じゃないんだから。あたしに見つか  
らないようにお風呂を覗き見る技術は世界一よ！」

「きりちゃん、瞬殺の狼はただの犯罪者だよ！」

「それにね、柔道、剣道、合気道。あわせて3日は通ったつわもの  
なのよ！」

「きりちゃん、それじゃ3日坊主にもならないよ！いや、3日狼か  
？！」

「極めつけはね、兄貴の作るものほとんどは発がん性が含まれてる  
のよ！」

「きりちゃん、それは失敗作だよ！狼は食材を無駄にしてるようだ  
ね！」

フランスぼうや、なかなかイラつくわね。完全に調子に乗って  
るわ。

「おら聞いたか、このランドセル！きりちゃんの忠誠なる狼はなあ、  
お前ごとき片手、いや眉毛1本でやつちまえるんだよお！」

眉毛じゃ何も起こらないわよ。それに兄貴の眉毛は細くて短いから  
結構な軟弱っぷりだと思うわ。

「う、う、ごめんなさい！許してくださいいいいい！」

ああー泣いちゃってる、兄貴の眉毛とランドセルならランドセルが

圧倒的有利なのに。むしろ完全勝利は目に見えてるのに。

「これに懲りたらなあ、今後一切僕に近づくんじゃねえぞ！今度は睫毛だからなあ！」

「はiiiiiiii！」

フランスぼうや・・・毛に何のこだわりを持つてるの？睫毛は眉毛にどう勝っているの？

「いやあ、きりちゃん！ありがとう！これで僕も堂々とランドセルに蹴りを入れられるよ！」

「そうね、今度はあなたが瞬殺の狼の餌食ね」

「・・・え？」

「当たり前でしょ？瞬殺の狼は悪い子にお仕置きするためと覗きをするためにいるのよ？それをあなたみたいな人放っておくわけないじゃない」

「あ・・・え・・・あの・・・冗談・・・あの・・・」

「覚悟することね。ちなみに柔道、剣道、合気道、全部近所の道場の師範してるから」

「ひiiiiiiii！」

治安維持もなかなか大変なものね。

## 幼稚園児の童話

この世にはたくさんの物語が存在していて、あたしたち子どもはいいことも悪いことも学ぶ。たとえば王子様とお姫様の苦労の末に実らず愛、助けた動物からの恩返し、人々を苦しめる悪者から取り戻す平和、嘘の吐きすぎで村人に見捨てられた男の愚かな死に様、自分の欲のために失った財産と思いやり。

だったらあたしが全部を混ぜて、もつといいもの作ってみてもいいと思わない？きつと貧困中学生生態日記よりはるかに売れるわよ。

「お兄ちゃん、あたしの作ったお話聞きたい？」  
「聞く！」

手始めに兄貴。夕飯の片付けが終わったのを見計らって話し掛ける。じゃないとお皿とかコップなぎ倒してあたしの所に来ちゃうからね。

「昔々」  
「うん」  
「あるところに」  
「うん、うん」  
「じーさんと」  
「うん！」  
「ばーさんが・・・」  
「うん！それで?!」  
「いました」  
「うっわ、老老介護の可能性大だね！」

聞いちゃいない。これは単に相槌打ってるだけじゃない。だから兄

貴は変態なのよ。

「お兄ちゃん、黙って」

「え？お兄ちゃんの感想とかそのときの感動の声は聞きたくない？

」！

「うん、むしろ邪魔」

「き、きりちゃん・・・！」

とりあえず話を進めた方がいいわね。兄貴との無駄話は心身に多大な影響を与えかねないからね。

「昔々、あるところにじーさんばーさんがいました。じーさんたちには子どもがいませんでしたが、二人もいい年なので自分たちの老後を世話してくれる手ごろな子どもを探しに村中探し回りました」

（いきなり拉致なんだね、さすがきりちゃん）

「すると、目の前に身寄りのなさそうな一人の小さな女の子が泣いているではありませんか。じーさんたちはさっそくその子をおかしを罫に家へ連れて帰りました」

（最近お年寄りの万引きとか問題になってるよね、さすがきりちゃん）

「10年後、女の子は大変美しく成長しました。そしてその美しい女の子は1匹の犬を飼っており、芸をたくさん仕込んでお金をたくさん稼ぎました」

（立派にじーさんばーさん孝行してるんだね、さすがきりちゃん！）

「しかし、なんと女の子はそんな仕事真つ最中に悪魔にさらわれてしまいました。女の子はその薄汚い外道に惚れられてしまったのです。どうしよう、女の子は悪魔の尻尾を引きちぎりました」

（女をなめんなってことだね、さすがきりちゃん）

「するとまあ、びっくりした悪魔は女の子を上空1000mのところで手放してしまいました。女の子はあるお城の庭に真つさかさまもうだめだ、なんてつまらない人生だったのかしら、無念でしかない、この世を恨んでやる。そう女の子が誓って般若心経を唱えるとどかん！見事城の美男子が助けてくれました」

（効果音からして美男子はかなりの怪力のようなね、さすがきりちゃん）

「美男子は女の子を見て一声、結婚してください、と言いました。女の子は即決して、二度とじーさんたちの所には帰りませんでした。一方そのころ、芸を仕込まれた犬は、なんとか自活し立派に生き抜きました。そして、自分を捨てた女の子に復讐するべく、旅に出ました」

（たくましい動物の愛憎物語の始まりだね、さすがきりちゃん）

「・・・続く！」

「・・・きりちゃん？」

「問答無用、続く！」

「ま、まあ続くんならいいけど・・・いつ続きは聞かせてくれるの？」

「タラちゃんが成人したら！」

「あの家族の時間は止まったままだよ！磯野家の時間軸じゃ一生続

き聞けないよ！」

童話作家さん、本当にお疲れ様です。尊敬します。

「あきたの?! きりちゃんあきちゃったの?!」

あたしは自分を過信してました、反省します。

「お兄ちゃん犬の今後のこと考えると眠れないよ! それに種類も気になるよ! 希望はチワワだけど!」

だから続きお願いします、眠いんで。ほら、もう9時じゃない。お子様はねんねの時間なのよ。

幼稚園人も健康第一なの。

## 幼稚園児の夢のない日

クリスマス、あなたはまだサンタがいるなんて信じてる？あたしはもちろん信じてるわ。だって、実際グリーンランドにいるのよ。あのもつこもこの白いひげ、一回でいいから顔をうずめてみたい。もちろんちゃんと洗った後によ。

「きりちゃん、これプレゼント」

にこにこしながら兄貴はあたしに大きな箱を手渡す。まったく、夢もあったもんじゃないわよ。暖炉がないから入ってこれないのはわかるし、そんな馬鹿でかい靴下なんてないわよ？でももうちよつと努力してもいいじゃない。せめてあたしが寝てるときにひっそり枕もとに置くぐらいの思いやり持ちなさいよ。

「ねえお兄ちゃん、どうして今渡すの？」

「ん？だって日本は不法侵入したらだめって決まりがあるんだよ。だからサンタの代わり。それにかわいいきりちゃんの寝顔を赤いおっさんになんて見せたくないーそれにきつと盗撮されちゃうよ！」

元気いっぱい、堂々言ってくれたわねこの男。

「・・・お兄ちゃんにはプレゼントなんてあげないから！」

「ええ？！あるの？！ほしー！ほしーよー！！」

実は今日はこの男の誕生日でもあるの。だからせっかく用意したけど、なんだか無性に腹が立つからあげないでおこう。・・・せっかく用意したんだけどね！わざわざ用意してあげただけどね！！

「きりちゃんお願い、ちょうだい！お兄ちゃんほしくてたまらない！！」

さすが、気持ち悪い。合掌したまま腰をくねらし、顔中から液体を垂れ流してる。兄貴、これは決して大げさじゃないよ、本当に気持ち悪い。

「わ、わかったから顔洗ってよ。いくら妹だからってその顔はNGよ、放送事故よ」

「くれるの？！本当に？！洗ってくるよ！！」

ああ、黙っていれば格好いいのに。もったいない、本当にもったいない。世の整備の行き届いてない顔の持ち主に謝りなさい。

「はい、帰ってきた！」

「・・・ちゃんと洗った？」

「もちろんだよ、歯も磨いたんだから」

「嘘つきにはやらないわよ」

「ごめんなさい！嘘でした！」

「よし、んじゃそこに座って」

「イエッサー！！」

ずっとポケットに隠していたもの。ちょっと汚くなっちゃった。

「き、きりちゃん・・・」

「文句あんの？」

丸く切った厚紙に金色の折り紙をはって、端つこに穴をあけてそこにリボンを通す。はい、これで簡単金メダルの出来上がり。

「こ、これ僕のためにきりちゃんが作ってくれたの・・・？」

「そうよ、いらないの？なら返してもらっわよ。びりびりのぐつちやぐちやにして焼却してやるわ」

「酷い扱いだね！」

「いるの、いらないの？」

「いる！」

しょうがないから兄貴の首にかけてあげる。兄貴はうれしそうにメダルの裏表を見る、青ざめる。

「・・・何も書いてないの？お兄ちゃんありがとーとか、お兄ちゃん大好きーとか、お兄ちゃん以外なにもいらないーとか書いてくれないの？」

「あたし畜生道には興味ないから」

「どこでそんな言葉覚えるの？！」

「最近の幼稚園児は何でも知ってるのよ」

本当に馬鹿ね。そんなこと恥ずかしくて書けるわけないじゃない。でも違うわよ？純粹に！家族として好きなんだからね！変な勘ぐりしたら許さないわよ！

「あ、きりちゃんお兄ちゃんのプレゼント見てよ」

そういえばすっかり忘れてた。夢のない兄貴の夢の箱の中身って・

・

「・・・これ何？」

「お風呂セット！」

「いや、わかるけどさ。今んとこシャンプーハットと手桶としか見えないんだけど・・・」

「え？それだけだよ？」

「・・・」

やっぱり夢なんてないのね、この男には。

幼稚園児も現実を見なきゃいけないのね。

## 幼稚園児の大晦日

来年まであと20分あまり。あたしは兄貴と年越しそばを食べながら紅白を見ていた。

「最近の紅白いまいちね・・・」

「えーそうかなー？」

外は雪がちらついて、犬が遠吠えしている。きっと仲間同士で寒いだの何だの愚痴りあってるんだわ。日本は今猛烈に寒い。冬なんだからしょうがない。

「・・・お兄ちゃん、こたつ入るなら服着なよ」

「きりちゃん、真冬にパンツ一丁でこたつは冬の風物詩だよ」

「そんな奇妙な風物詩聞いたことないよ」

さすがは変態兄貴。そばをどんなに荒々しくすすっても汁は決して散っていないわ。そして食べ尽くした兄貴は器を置くと、何やらもそもそと怪しい動きをし始めた。

「ふうー完全変態完了ー」

「何が?!」

「え?」

こたつに手を突っ込んで取り出したのは、イチゴ柄のパンツ。

「・・・」

「ああ!無言でこたつから出ないで!」

「あたしお兄ちゃんは人より大分おかしいとは思ってたけど、どう

やらあたしの想像以上におかしかったのね。失望した」

「し、失望……」

項垂れる兄貴を横目に、あたしはテレビに目を向けた。もうそろそろ終わりのようね、トリが出てきたわ。毎年よくやるわよね。きつと温暖化促進に大きな影響を与えてると思うの。ま、面白いからいいでしょう。

「きりちゃん、あの……その……」

「何？裸族さん？」

「ああ！お兄ちゃんと呼んで！服着るから！」

「なんだかそれも嫌ね……で、何？」

「初詣行かない？」

「行かない」

「そ、そんな即答しなくても……」

初詣なんか行つてばったり知り合いにあつたらどうすんのよ。そんなときに限つて兄貴の変態がばれたりしたらどうすんのよ。あたしもう二度と幼稚園に行けないわ。一生笑い者なんてまっぴらごめんだわ。

「ごめんね、あたしもう眠いの。お兄ちゃんあたしの代わりに神様にいっぱいお願いしといて」

「まかせろ！」

単純で本当によかった。お兄ちゃんと呼んであげると、さっきとは打って変わつてはつらつとした顔。ちゃんと服も着てるし、あたしもゆっくり眠れるわ。

「きりちゃんがこれからもおにいちちゃんのこと大好きで、ずっと一

緒にいるように祈ってくるね」

「お兄ちゃん、一緒に行こう」

あたし、睡魔になんか負けるんじゃないわよ！これからの生活がかかってるんだから！！

あたし頑張れ！目覚める脳みそ！！

「きりちゃん？」

あたし・・・

「負け、ない・・・わ・・・よ・・・」

「あれ、やっぱり眠かったか！。しょうがない、きりちゃんのために精一杯お願いしてくるよ」

ああ、体が動かない。兄貴があたしを抱えてる。あつたかくてふわふわで優しくて・・・

「今年もよろしくね、きりちゃん」

あたしはまた来年苦勞するのね。幼稚園児も楽じゃないわ。

## 幼稚園児のなぞ

「ねえきりちゃん、ごうかんってなに？」

おはようもなしにいきなり質問とは、建築ぼうやもえらくなつたもんね。人間関係を良好にするには、あいさつをするかしないかにかかってんのよ。建築ぼうやはだめね、会社に入ったら瞬く間に退職よ。

「昨日ね、ニュースで女の人のごうかんで死んじやったってあったんだ。でも僕ごうかんってわからなくて、お父さんに聞いたらいつかわかるぞーって言うんだ。今知りたいのにさ。馬鹿にしてんのかな？」

「馬鹿ね、そんなことお父さんに聞いたぐらいじゃわかるわけないじゃない」

「えー僕知りたいよきりちゃんは知ってるのー？」

「・・・知ってるわよ」

知るわけないじゃない！あたしにわかるぐらいならあんたもわかるでしょうが。幼稚園児にわからなくて、聞くと大人が口を濁らすんならきつとんでもないことなのよ。それぐらいわからないのかしら。

「どついう意味なのー？」

「・・・大人になつたらわるわよ」

「えーきりちゃんまさか知ったかぶりー？」

「お黙り、このカメモシ」

「ひ、ひどいよ！今日はただ単に緑色の服着てるだけじゃない！」

「におうのよ、青臭いにおいが！」

「とにかく教えてよ！知ってるんでしょ！」  
「・・・」

今日はやけにしつこいわね、このカメモシは。っーか今日からあなたの名前はカメモシよ。

「・・・ごうかんつてのはね」  
「うん！」

ああ・・・何この純粹で眩しい眼差しは。どうやら教えないといけないわね、この美しく腹立たしい瞳のために。本当のことは知らないけど。

「昔ね、郷田さんって人がいたんだけど、その人はとってもぶさいくで女の人にモテなかったの。で、その郷田さんはその腹いせに女の人に思いつきり空き缶を蹴りつけたの。そりやもう痛いなんのつて。女の人はその痛みで悶絶したそうよ。それから男の人が女の人に酷いことしたときは、ごうかんつて呼ぶことにしたのよ」

「へーすごい！きりちゃん物知りー！さすがー！」

「当然よ、このくらい常識よ」

「ありがとう、きりちゃん。これで僕も常識人だよ！」

「よかったわね、常識カメモシ」

「ま、まだ言つてたの？！」

「いいじゃない、世の中常識を持ったカメモシなんてそうそうないわよ。もっと喜びなさいよ」

「わ、わかった」

おめでとう、これであなたも本当の意味を知るまで笑い者よ、カメモシ。あたしを知ったかぶりだなんて言ったことを後悔しなさい。

「昨日、またもや強姦未遂事件が発生し付近の住民は不安に陥っています」

「やだねー、最近の世の中は物騒で困るよ」

「本当、郷田さんも蹴り飛ばす以外に何か思いつかないのかしら」  
「？」

幼稚園児もわからないことだらけね。

## 幼稚園児の祖父母

あたしのお母さんとお父さんはいない。でもおばあちゃんとおじいちゃんがいけないわけではない。なんでおばあちゃんたちがいるのにあたしが施設送りになりそうだったって？それはこれから説明するわよ。

「きりちゃん、お久しぶりねー！」

「久しぶり、おばあちゃん」

お父さんのお母さん、おばあちゃんはとも元気で少々趣味が変・  
・ではなくて個性的な人なの。上下ヒョウ柄で、真っ赤な口紅、丸  
わかりの偽まつげ、チリチリの紫色の髪、菊の花のネイルアート。  
声はでかいし、大口開けて笑うからいつも奥の金歯がよく見える。

「きりちゃん、元気にしてたかね。病気にはならなかったかい？」

「うん、おじいちゃんも元気そうだね」

お父さんのお父さん、おじいちゃんはとってもとっても一般人。地味で特に特徴もない、そこら辺にいそうな少し髪の毛の散らかったただの人。でも実はすごい人で、お父さん、兄貴に柔道とか教えた強い人なの。人は見かけによらないって、こういうことね。

「お正月は日本に帰れなかったから、はい、お年玉」

「ありがとう、おじいちゃん」

「あらゝ私の分もちゃんと入ってるわよー！」

「あ、ありがとう、おばあちゃん」

おばあちゃんたちは今アメリカに住んでるの。第二の人生ってやつ。

これよ、理由は。たまたまお母さんたちが死んだときもアメリカにいて、情報が遅かったの。おばあちゃんたちが帰ってきたときには、兄貴はあたしと暮らすことを決めてたらしくって。

なんせおばあちゃんたちは今でもちゃんと仕事をしてるから。おばあちゃんは日本学校の校長先生、おじいちゃんは小さな和菓子店の店主をやってるらしい。おじいちゃんはいいいとして・・・おばあちゃんも校長って、よくアメリカ力は認めたわね。

「・・・日本円札はいいとして、ドル札って？」

「あゝしまったわー！ノリで入れちゃったわー！」

豪快に笑うおばあちゃん。金歯がまた増えてるわ。おばあちゃん、歯は大切にしなきゃ痛い目見るわよ。

「きりちゃん、幼稚園はどうだい。みんなと仲良くして、喧嘩なんてしてないだろうね？もし吹っかけられたらまずは目でやりなさい。手は出されたらちゃんとよけて、それから反撃するんだよ。相手が手を出したのは変わらないんだから、後は思う存分やればいいんだから」

「わ、わかってるよ」

「・・・おじいちゃんもなかなかね、やっぱり人は見た目によらないわ。」

「ばあちゃん、じいちゃん、日本にはいつまでいれるの？」

やっと登場の兄貴、おばあちゃんたちが濃すぎていつもの兄貴の存在が薄れていたわ。

「明日帰るわよ？」

「あ、明日？急なんだね。もうちょっとゆっくりしてけば？」

「なぐに言ってるのよ、あんた仕事あるんでしょ？私もあるし」

まあ、平日の20時に突然やってきたのだから、しょうがないと言えましょうがないわね。それにしても荷物が多い。おじいちゃんなんか小さなかばん一つなのに、おばあちゃんはスーツケースが二つもある。中にはどうせ衣装とか小道具ばかりだろうに。

「きりちゃん、お兄ちゃんとしっかり暮らすんだよ」

「ああ、もういつそのこと私たちの家に引っ越せばいいのに！」

「だから、それは断ってるでしょ、ばあちゃん」

「そうだけど」

兄貴はもうすぐ20歳だったけどまだ19歳だった。でも兄貴は一人で日本であたしを育てることを、おばあちゃんたちにお願ひしたらしい。お母さんたちの思い出の残るこの家で、あたしを立派に育てたいんだって。おばあちゃんはもちろん反対したけど、おじいちゃんは意外にあっさり承諾したらしいの。

おじいちゃんは、兄貴の何を信じてそんなに簡単に許したのかしらね？なんとなくわかるようで、全然わからないけど。

「ばあさん、きりちゃんはちゃんといい子に育ってる。これもお兄ちゃんがしっかりしてるおかげだ。おじいちゃんは信じてたよ、お兄ちゃんはきつと約束は守るって」

「・・・そうね、きりちゃんはとってもいい子よ。かわいいし、気品あふれてビューティフォーよ。私もわかってるわよ。でもね・・・」

「

「ばあちゃん、わかってる。僕はまだまだだけど、きりちゃんはしっかり守るから。ちゃんと約束するから、心配しないで」

兄貴の大きな手が、あたしの頭をぽんぽんと柔らかく叩いた。思わず見上げると、そこにはいつもの優しい笑顔があつて、あたしはすごく安心した。

「もう一度約束する。僕はきりを必ず守るよ」

あたしは小さい。だって兄貴の顎しか見えないもの。でも、視線の先のおばあちゃんたちはすごく優しい目をしてる。おじいちゃんは兄貴の肩を2、3度叩いてくるりと背を向けた。

「さあばあさん、もういいだろう？よくわかっただろう、その子の決意は」

「・・・」

「私は先に寝させてもらおうよ」

おじいちゃんは振り返ることなく、部屋から出て行った。その背中のはなんだかとても大きいようで、小さく見えた。少しだけ、おじいちゃんの背中が寂しいと言ってるように見えたから。

「ごめんね、本当は二人をアメリカにつれて帰ろうかと思ってたの」

「わかってたよ、だから急に來たんだろ？それぐらいわかるよ」

「で、でもお年玉は本当にあげたかったのよ?!」

「はいはい、わかってるって」

兄貴はいつもと違う笑い声をあげながら、あたしの手を強く握り締めた。

「ばあちゃん、ハワイには移住できないけど遊びに行くよ。それにばあちゃんたちもいつでも遊びに来てくれてかまわないから。きりちゃんと一緒に歓迎するよ、ね、きりちゃん？」

「うん、おばあちゃん、また日本に来てね」

おばあちゃんは涙目になったかと思うと獣のうなり声にも似た声をあげ、あたしたちを思いっきり抱きしめた。

「こんなにいい子たちを残して！本当にあの子たちは馬鹿者ね！」

香水の匂いはきついし、おばあちゃんのおなかはでっぷりだったけど、あたしはすごくうれしくて泣き出しそうだった。

だって心はとても温かいし、大きく膨らんで、今にも楽しさとちよつと悲しい気持ちがはじき出そうだったから。きっとその奥にはあたしにもよくわからない気持ちが眠ってて、だからこんなにも胸がきゅんとする。でもそんなことは言わないの。だって、あたしはすごく大事にされてるから。あたしは今幸せだから。

「大好きだよ」

誰かに言っただんじやない。みんなに伝えたいよ、あたしの大切な思い。お母さん、お父さん、あたしの声聞こえるかなあ？

「お兄ちゃんもおばあちゃんもおじいちゃんも、もちろん母さんも父さんもみんなきりちゃんが好きだよ」

兄貴の腕があたしを強く強く抱きしめた。あたしも、兄貴をもっと強く強く抱きしめた。

## 幼稚園児の疑惑

最近兄貴の様子がおかしい。まあ、兄貴がおかしいのは正常な気もするんだけど、最近は・・・なんというかこそこそしている。

「・・・お兄ちゃん？携帯鳴ってるよ？」

今も携帯がずっと鳴りっぱなしだが、一向に取らない。そわそわして、部屋を見渡したりテーブルの上にあるものを無意味に動かしている。

「そ、そーだね。でもいいんだ、きっと不幸の手紙の携帯バージョ  
ンなだけだから」

「何それ？お兄ちゃん誰かの恨み買うようなことしたの？」

「とんでもない！お兄ちゃんは真面目に堅実に清く正しく、日々神の恵みに感謝しながら生きてるんだよ！そんなことあるわけないよ  
！」

真っ青になりながら何を言ってるんだか、バレバレなのよ。どうせ兄貴のことだから、何かしでかしたんだわ。

「き、きりちゃん！何するの！」

ソファの上で震える携帯を開くと、画面には「美保」の名と番号。  
これはもしか・・・

「もしもし？」

「わあ！きりちゃんお兄ちゃんの予想を軽く飛び越えたよ！！」

慌てふためく兄貴。これはもう確定のようね。

『も、もしもし、主任・・・じゃないですよね?』

「そうよ、あんなのと一緒にされちゃおしまいよ」

「きりちゃん酷いよ!お兄ちゃんシヨック!」

うん、声はかわいい人ね。上品な感じはするし、あんなに待たされてその上本人が出なくても文句のひとつもないだなんて、なんて寛大な人なのかしら。あたしだったら3コール以内に出なかったら絶交よ。

『あの、もしかしてご家族の方ですか?私は柳原美保と申します』

「あたしはきり、美保さんの上司の妹みたいなもんよ」

「きりちゃんはれっきとした妹です!」

礼儀正しい人ね、高得点よ。兄貴の知り合いにしては随分まともなようね。あの変態の知り合いといったら、よっぽどのうつけ者か愚か者ぐらいだろうに。外面はいいのかしらね。

『そうですか、妹さんなんですな。随分大人っぽいしゃべり方だったので奥様かと思いましたが』

「そんなまさか、兄貴の嫁になるぐらいならこの世を去るか、火星にでも嫁ぐわよ」

「お兄ちゃんはまだ嫁に行くことは許しません!」

外野がうるさいわね、ここはストレートに聞けつてことなのかしら?そうよね、そうに決まってるわ。

「美保さんはお兄ちゃんの彼女なんですか?」

「ぬああ?!きりちゃんーん!!」

今にもあたしの持つ携帯を奪い取らんとする勢いの兄貴。でも取らせないわよ。このあたしから何か奪おうものならそれこそ地獄に落ちればいいわ。

『えっと・・・そうです』

「へっやっぱり」

「ちーがーうーだーろー！誤解だー！誤解だよきりちゃん！！」

奪い取りはしなかったけど、直接電話に向かつて叫ぶ兄貴。やっぱりそうだったのね、だからそんなに涙を流しながら隠そうとするのね。馬鹿ね、恥ずかしいことじゃないのに。20代の青少年だったら何も不思議なことじゃないのよ？むしろ当たり前ね。

「違うんだよきりちゃん！この人はね、お兄ちゃんのとんでもない勘違い同級生なの！中学校から一緒でね、それから高校・大学・就職までたまったま一緒だったの！それをこの人は『運命だね』なんて言っちゃってる頭のおかしい人なんだよー！それで向こうはなぜか急に彼女気取りしてるの！おかしいよね？！本当おかしいっただらありやしないよー！！」

「うるさいよ、黙って」

「い、一刀両断？！」

そんなもの運命以外になんだって言うのよ。だいたいね、兄貴の行った学校は高レベルだし、今の就職先だって普通そう簡単には入れないのよ。もし意図的だったとしても、ここまで兄貴について来るってのはすごいことだしありがたいことね！こんな変態に好意を持つてくれたことに、あたしは感動すら覚えるわ！

『あの・・・もしかして今お取り込み中でしたか？』

「大丈夫よ、お兄ちゃんのいつもの病気が出ただけだから」

「お兄ちゃん健康優良児です！」

「お兄ちゃん、黙らないと今後一切口きかないから」

「・・・」

「よし」

さて、とりあえず黙らして。今日はもう9時ね。

「美保さん、今日はもう遅いから後日でいい？今度は食事でもしながらゆっくり話したいわ」

『よろしいんですか！ありがとうございます、主任いつまでたってもご家族に会わせてくれなくて。いまだに私が調べたプロフィール以外は教えてくれないんです。そしたら今度の日曜日あたりよろしいですか？』

「いいわよ、楽しみにしてるわ」

『じゃあ時間と場所についての相談はまたお電話でよろしいですか？』

「いいわ」

『ありがとうございます、夜分遅くにすみませんでした。それでは失礼します』

さすが一流会社に勤めるだけはあるわね。これは今度の日曜日が楽しくなってきたわ。

「~~~~~!!」

「何してんの？ちゃんとしゃべらないとわかんないよ……あーいいよしゃべって」

律儀に口をつぐんでいた兄貴は、あたしが電話を切るとさっそく暴れていた。そんなことをすっかり忘れていたあたしは、やっぱり兄

貴は馬鹿なんだと再確認したわ。

「きりちゃん！なんで勝手にあんな約束するの？！相手は予想以上に変態なんだよ！！」

「お兄ちゃんより変態だなんて、ある意味貴重よ、奇跡よ。UFOとかネッシー以上の大スクープよ」

「き、きりちゃん・・・！」

まあ多少は覚悟してるわよ？ここ1週間の兄貴の様子からして只者じゃないのは確かね。しっかりと見せてもらっわよ、柳原美保さん。あなたの変態っぷりをね。

幼稚園児も気を抜けないわ。

## 幼稚園児のお食事会

「ご趣味は？」

「読書を、特に男同士の熱い物語を好んです」

「休日には？」

「テレビゲームを、これも男同士のねつとりとした友情もどきをプレイ中です」

「実はあなたは？」

「俗に言う腐女子ですわ」

「やーめーてーくーれー!!」

机に突っ伏し、泣き喚く兄貴。本当、やめてほしいわ。周りのお客さんにも迷惑じゃない。

「柳原、もういいから！これ以上きりちゃんに変なこと言うのやめて！」

「変？主任、あなたはたった今全国の腐女子を敵に回しましたよ？怖いですよ？」

「今この状況が怖いから！」

「まあ落ち着きなつて、お兄ちゃん」

「どうしてきりちゃんはそんなに冷静?!」

目の前の焼肉定食にほとんど口をつけず、涙ばかり拭いて。牛に謝れ、おいしくいただかないとはなんたることか！この子だって本当は今ごろゆったり草でも食べて、生を全うしたはずなのに。人間の身勝手で奪う命を、粗末に扱うなんて許さないわよ。

「美保さん、こんな男のどこがいいの？あたしだったら絶対に絶対

に絶対に嫌だけどな」

「あらまあ、お兄様をそんな風に言うのはよろしくありませんよ。ね、主任？」

「そうだけどね、ショックだけどね、どうしてね、2人はね、そんなにね、仲いいの？」

「なんでストーカーなんてしてるの？いつから？」

「ストーカーだなんて、ただの追っかけですよ。実は私会社でミスをして、落ち込んでたときに主任に励まされたんです」

「無視ですね」

ぽつと頬を赤らめる美保さん。これは結構本気なようね。さっきから氷しか入ってないコップに刺さったストローを、ずっとかき回してる。それもハイスピードで。どんどん氷が飛び出していくの気づいてないのかしら？

「そのとき男性の複雑で愛憎に満ちた関係、時には誘拐・拉致・監禁、救い出さんとする攻めの深い愛情、受けのツンデレ具合にワールドアウトだった私が、初めて3次元の男性に興味を持ったのです」

「・・・深いわね」

「きーいーちゃーだーめー！」

「そして私思いました。これは運命なんだって」

「安易だよー！ミスした後輩を慰める上司なんて全国各地にいるよー！」

ああ、とうとう氷がなくなっただわ。でも気づいてないのね。ウェイトレスさんがとても困ってるわよ、この机の上の惨状に怯えながら。

「それから主任のことをこと細かく調べさせていただきました。それはもう、主任の好きなものから体中のほくろの数まで」

「怖いよ！純粹に怖いよ！」

「主任も最近は私と一緒にいて・・・だから私もてっきりいつの間にか恋人同士になったんだって」

「被害妄想もここまできたら神業だね！っていうか最近君わざとミスしてるでしょ？！コピ―30部のところ300部ってなんだよ！新手のいじめかなんかですか？！」

「なのに先日頼もしい女性の声が電話に出て・・・きりちゃんのことですよ、あのときはびっくりしました。確か主任のご自宅には妹さんしかいらっしやらないと調べていたので」

「調べてる時点であなとは立派な犯罪者です！」

悪い人じゃなさそうね、ただ猛烈に純粹で、初恋に浮かれてんだわ。大体男同士の複雑で愛憎（省略）が好物の人が、よりにもよって兄貴とはね・・・類は友を呼ぶってやつかしら？

美人なのに、きっと学生時代はモテまくってたんでしょね。この人の本性を知らない人は淡い恋心と下劣な下心を持って近づき、玉砕しつつトラウマを抱えその後の人生を歩んでいく運命に翻弄されているんだわ。罪作りな女ね、美保さんは。

「美保さん、お料理は？」

「実家が料亭をしておりますので、それなりには」

「家事は好き？」

「ええ、読書の次に洗濯や掃除が好きですわ」

「何か習い事とかしてましたか？」

「茶道と華道と弓道、少しピアノを」

「秋の田のかりほの庵の苫をあらみ？」

「わが衣手は露にぬれつつ。百人一首の1番歌をご存知なんですね、感激いたします」

「お兄ちゃんのこととはどれぐらい好き？」

「2次元の世界を軽く飲み込むぐらいには」

「・・・合格！」

「ええええええええええ？！？！？！？！？！？」

料理もできるし、家事も好き。そこら辺の女に比べて頭はいいし、美人だし、教養がある。ちよつと危険な思想を持つてそうだけど、そこは多分大丈夫でしょ。・・・多分。

それに2次元を軽く飲み込むだなんて物凄いことよ。2次元は宇宙と一緒に広がり続けてるんだから、それを飲み込むだなんて恐ろしい愛ね。これを断ったときには兄貴の命は存在しないわね。

「きりちゃん！よく考えて！確かに柳原は今聞いたところではしっかりした女性だと思うよ？でも人間としてどこかおかしいでしょ？！」

「馬鹿ね、こんないい人いないわよ。それに今後一切お兄ちゃんを好きだなんて言う人現れないわよ」

「そうです、現れても消します」

「ほらあ！消すって！消すって言うてるよ！！」

「美保さん、末永くお兄ちゃんをよろしく願います」

「こちらこそ、よろしく願います」

さすがにお嬢様ね、こんな場所でもしつかり床に正座で三つ指だわ。常識が・・・あるのかないのかよくわからないけどまあいいわ。

「何ちゃっかり挨拶しちゃってんの？！僕の意味は無関係？！」

「お兄ちゃんはおあたしの人選に文句があるの？あたし・・・悲しい」

「ああ！違うよ！きりちゃんがお兄ちゃんのことを思ってくれるのはうれしい！うれしすぎて血が煮えたぎるようだよ！でも・・・」

このあたしの上目遣いを駆使してもはつきりしないなんて、相当美保さんが怖いよね。これは時間がかかりそうだわ。

「美保さん、お兄ちゃん照れてるらしいの。でもきつといつか素直になるから」

「はい、それはわかってます。主任とんだ恥ずかしがり屋さんですから」

「僕の恐怖のおのきを単なる恥だなんて言葉で片付けないで！」

「お兄ちゃん、そんなこと言っていると嫌いになるよ」

「そ、それだけはお勘弁をー!!」

幼稚園児の仲人もなかなかじゃない？

## 幼稚園児の看病

今日は日曜日。だから幼稚園もお休み。  
そんな日に限ってあたしの兄貴は

「うわー・・・お兄ちゃん船酔い」

「馬鹿ね、ここは陸よ。船上じゃないのよ」

風邪を引いた。

「ごめんね、きりちゃん・・・動物園行く予定だったのに」

「大丈夫よ、今度の休みはデイズニールランドだから」

「うっはーつりあがったーでもきりちゃんのご要望ならなんでもお  
つけー」

そう、今日は動物園に行くはずだった。あたし歌の時は散々馬鹿にしたけど、実はそうが好きなのよね。だってあんなに図体でかいのに、目はつぶらなのよ?!どうよこのギャップ!!最高のギャップもえってやつよ!!!

そんなことを考えていると兄貴の体温計が音を立てた。のろのろと数字を見て、兄貴はため息をつく。

「何度だったの?」

「んー38度？」

「聞かないでよ、とうとう脳みそ煮えた？」

「やだなー、お兄ちゃんはいつでも絶好調だぞう！」

「そうね・・・」

38度だったら病院に行ったほうがいいんだろうけど、生憎あたしは運転できないのよね。

「タクシー呼ぶ？」

「いいよ、寝てれば大丈夫だから」

そんなことを言って無理やり笑う兄貴。

汗だらだらで息も絶え絶え、そんなに大丈夫？風邪を馬鹿にしてんの？風邪は万病の元とも言われてることぐらい知ってるでしょ？甘いわ！！

「じゃ救急車」

「タクシーを呼びましょう」

「わかればいいのよ」

それから病院に行くと「風邪ですね」と言われて薬を出された。兄貴も「はあ、そうですか」なんて軽く言っただけ、家にたどり着くころには足取りも危なかった。

布団にばったりと倒れこみ、しばらく動かないので

「ひい?!」

踏んでみた。

「き、きりちゃん、お兄ちゃん踏まれるより撫でられたいな」

「くだらないこと言ってんじゃないわよ。ほら、さつさと薬飲んで着替えて寝なさいよ」

「く、くだらない・・・」

「さつさとして。今度は別の大切なところ踏みつけるわよ」

はあい、と力なく返事をしてあたしの言われた通りに動く兄貴は、いつもの何百倍も大人しい。しばらく風邪でもいいかもしれない。あ、そしたら兄貴働けないのか。イコールあたしの生活も危ういのよね。やっぱり駄目ね、さつさと治ってもらわないと。

「きりちゃん、お兄ちゃんは大丈夫だから自分の部屋にいてね」

「なんでよ、仮にも病人でしょ。看病してあげるわよ」

「駄目、うつっちゃうよ? きりちゃんが風邪なんか引いたらお兄ちゃん泣いちゃう! でもきりちゃん看病したいなーきりちゃん風邪引いてるとき目がうるうるでほっぺが赤くてちょーかわ」

「変態」

「な、なんか短い言葉って殺傷能力高いよね・・・」

なんだか元気そうだから戻ろう。変態っぷりが復活してきたからきつと寝てれば大丈夫ね。

それからぐずぐず言う兄貴を放って、あたしは自室へ戻った。でもとくにするともない。そしてなんだか寂しい。いつもは嫌って程かまってくる兄貴が静かだからかな。

「・・・おかゆでも作ろっかな」

もちろんおかゆなんて作ったことないわよ？でも大丈夫でしょ。ようはやわらかい米！

とりあえず炊飯器に米を2合入れ、水を4合のところまで入れてスィッチ。しばらくたって出来上がりの合図が聞こえたからふたを開けてみた。

「・・・まあこんなもん？なの？」

兄貴の作るおかゆとはかなり違う気がするけどいいでしょう。兄貴だし。

器に盛って、スプーンとお茶と一緒にお盆にのせ兄貴の部屋に行く。なんて安定感がないのかしら。台車でも買いなさいよ！こっいうとき困るでしょうが！

「お兄ちゃん・・・大丈夫なの？」

「ああ」

部屋に入ると兄貴は起きていた。しかし様子がおかしい。何故か半裸で笑ってる。

「なんで寝てないの？」

「きりがいなくて寂しくて」

鳥肌がすごい。あたし人生最大の鳥肌かもしれない。

普段から変態だ、変態だと思っていたけど。真顔で半裸で笑いながら。

「お兄ちゃん・・・狂った？」

「何を言うんだい、お兄ちゃんはいつものお兄ちゃんさ」

「いや、いつものお兄ちゃんだけど。度合いが違っつていうか」「ん？いつもよりかつこいって？きりは正直者だな、かわいいよ」

変なことを言ってる。っていつかこの人誰だろう？そもそも人なの？地球人なの？

「おや、きり。お兄ちゃんのためにおかゆを作ってくれたのかい？さすがお兄ちゃんのかわいいきりだ。料理もお手の物だね」

「あー、うん。じゃ勝手に食べて」

関わるのはやめておこう。病気で頭やられたんだわ、きっと。それかあの薬のせいね。だって医者もハゲてて脂まみれで汚いおっさんだったし。看護婦もスカート短かったし。なんか患者さんみんな生気なさ気だったし。呪われてるんだわ、絶対。

「食べさせてくれないのかい？きり。お兄ちゃんは病人なんだぞ？」

いつもの兄貴なら作った時点で「ああ！きりちゃんの手料理！写真撮ってから冷凍保存しよう！」となかなか手をつけないのに、おねだり？兄貴がこのあたしにおねだり？冗談じゃない。

「甘ったれてんじゃないわよ！！！」

「ぎゃあああ！？」

最初に予告しといたわね。でも喜ぶことね、手加減してあげたんだから。

「急所・・・さすが・・・我が妹・・・」

「感謝しなさい、それでも体重分だけよ」

そして兄貴は下半身で一番大事な所を抑えたまま、意識を失った。ちよつとやりすぎたかしら？でもあたしの体重なんてたかが知れてるでしょ。そのまま眠りなさい。でも今度またあの兄貴だったら容赦なしにつぶすから覚悟することね。

それから兄貴が目を覚めたのは7時間後。もうすっかり元に戻っていた。

「あれー？なんかあそこが痛い・・・って、これおかゆ？！きりちやんが作った？！」

「そうよ」

「うわー！ありがとー！！写真写真ー！！！！」

「写真撮ってる暇があるならあたしが食べるわよ」

「食べます！！」

おいしー！シンプルイズベストー！！と、冷え切ったおかゆを兄貴はうれしそうに食べた。

「・・・やっぱりまだこっちの方がマシだわ」

「何が？」

別に、とだけ言って座りなおした。

「お兄ちゃん、薬効いたね」

「あーでも変じゃなかった？お兄ちゃんさー薬飲むと何故か記憶がさっぱりなんだよねー」

「ああ・・・そうなんだ」

この瞬間病院への疑惑は吹っ飛んだ。

ごめん、汚いおっさんだなんて言っで。スカートだっておばさんがはいてるからたいした攻撃にもならないし、病院なんだから生気なくて当然よね。本当、ごめんなさい。

今度からは本人の治癒力に頼ることにするわ。もう二度と薬なんて飲まさない。

ああ、あたしって苦労人。

## 幼稚園児の看病（後書き）

お久しぶりでーす。

これからは・・・多分！もうちょっと！がんばります！予定ですけど！！！

お知らせ

プロフィールちよっただけいじりました。よかったらご覧ください。  
ついでに坊ちゃんの方もよろしく願います。（がんばるぞー・  
・予定ですけど！）

## 幼稚園児のヴァレンタイン

人生、女なら一度は意識するこの日。世間は愛の日だとか恋人の日なんて言うけど、本当はそんな甘いもんじゃないのよ。

「そう、今日はヴァレンティヌスの命日！」

恋人をふるさとに残したままだと思っ存分戦えないとか理由でローマ皇帝は兵士の結婚を禁止！それをかわいそうに思ったヴァレンティヌスって人は秘密に結婚させて、それがバレて処刑された日なのよ！それを！愛の日に勝手にするなんて！！

「いやー、お兄ちゃんは線香よりチョコ派かな」

にこにこしながらあたしの前に両手を差し出す兄貴。

「・・・何の真似？」

「え？お兄ちゃんきりちゃんのチョコほしいなーって」

なんて・・・

「この愚か者があー！！」

「ひい?!」

阿呆なのかしら!

人の!

それも!

外国人の!!

「命日にチヨコをねだる馬鹿にはそれぐらいがちょうどいいわ」

「き、きりちゃん・・・ここはね・・・そう頻繁に蹴り上げる場所じゃないよ・・・?お兄ちゃんこの年に使い物にならなくなるのはちよつと遠慮したいな・・・」

「いいじゃない。ついでお兄ちゃんも便乗しなさいよ」

「何に?!ヴァレンタインに?!それとも命日に?!」

「言っていいの?言っちゃっていいの?」

「いえ!やっぱいいです!!」

ヴァレンティヌスって人がどんな人かいまいちわかんないけど、外国人ならきつとかっこいいわよねー。なんてったって背が高くてーなんか不思議言語操ってーリアクションがみんな芸人の出川みたいに大きくてー

「ふーんだ、トムクルーズが外国人だからってー。お兄ちゃんの方がかっこいいのにー」

空耳？そんなわけないわよね。部屋の隅でぼそつと言ったつもりらしいけど、あたしの耳は誤魔化されないわよ。

「お兄ちゃん・・・今なんて言った？あのトムクルーズを・・・あたしのトムを！！」

「きりちゃんのトムじゃないやーい！お兄ちゃんの方が100倍かっこいいわーい！なんだよ！ラストサムライ見たからって！きりちゃん実はトムより渡辺謙の方を気に入ってたくせにー！！」

開き直って言い返す兄貴。でも震えてるの、面白いけど・・・そう簡単に許されると思ってんの？！

そう、あたしは昨日ラストサムライを初めて見たの。感想としてはね、感動！感動よ！！それにかっこいい！！いい！！着物いい！！もちろん渡辺謙に関しては着物着てたからよく見てたけど？！本命はトムよ！トムクルーズ！！何あれ？！もうあたし言葉になんないぐらいよ！！！！

「お兄ちゃんなんか大っ嫌い！！！！」

腹の底から叫んでやったら、兄貴は何かのドラマシーンみたいに涙を一滴こぼした。

あれ？いつもは大声で「いやだー！嫌わないでー！なんでもするからー！」と泣きついてくるのに。

「お、お兄ちゃん？」

それからふらつと立ち上がると、そのままリビングを出て行った兄貴。

「おかしい・・・あたし変なこと言った？！」

あまりにも違う反応にあたしは少し心配になり、そつと2階の兄貴の部屋をのぞいた。

暗い、なんていうかいろんな意味で。つーかわざわざカーテン閉めるな！演出する余裕はあるんかい！

「うう・・・大嫌いって・・・そんな・・・チヨコもほしかったのに・・・大嫌いなんて・・・」

ベッドにうつ伏せで、両手を目の下に置いたままうなってる。

ここまでチヨコほしかったんだな！。でもどうせ会社でもらえるくせに。外面いいからモテてるの知ってるんだから。それに美保さんもいるし。

「お兄ちゃん」

「き、きりちゃん？！なんでここに？！」

あーまともに兄貴の顔見れない、直視できない。なんかいろんな液体にまみれてる。

「はいこれ」

「これ・・・」

出し惜しみしてたチョコを兄貴の手に無理やり押し込めた。家にあつたチョコレートをハートの型に溶かして流して固めただけの何の変哲もないただのチョコ。

「・・・義理だから！義理なんだからね！！」

「ええ？！本命は誰なの？！」

「それ聞く？聞きたいの？」

「いえ！きつと聞いたら誰相手でも手加減なしでぶん殴るから！そしてたらきりちゃんに嫌われそうだからやめとく！」

「そ、賢明な判断ね」

たしかに命日だけど。トムクルーズ好きだけど。やっぱり兄貴は好きだから。それにほしがってたの知ってたし。っていうか「あー、手作りチョコほしーな」。棚に板チョコはいつてるんだけどなー」なんて言ってる時点であからさますぎんのよ。

「きりちゃんありがとう、ごめんね。お兄ちゃん盛大にやきもち焼きちゃっただけなんだ」

「わかつてるわよ。あたしも言い過ぎた、ごめんなさい」  
「き、きりちゃん・・・!!」

それから嫌がるあたしを抱きしめて、また大事な場所を蹴り上げられた話はしなくてもいいわね。あ、話しちゃった。ま、いつか。そんなわけでもでたくヴァレンタインは終わり・・・かと思いきや。

「こんにちは」

「は?! 柳原!! お前何ナチュラルに不法侵入してんの?! 警察呼ぶよ?!」

「こんにちは、どうぞリビングへ行ってください。ここは危険地帯なので」

「ではお言葉に甘えて」

「なんで?! なんでそうなるの?! 何この展開! ついていけない!」

「主任、早く行かないとまたきりちゃんに怒ら・・・嫌われますよ?」

「なんでわざわざ心に傷をつける言い方にする?! ああ! きりちゃん待って!!」

その後、呼んでもいないがやってきた美保さんの手作りチョコを3人で仲良く食べたことは、あたしの秘密の花園(単なる日記)にしっかりと書き込んだわ。だって、こんなに楽しいの久しぶりだったから。まるで本当の家族みたいで。まあ、変態とストーカーじゃ家族って言つかなんかの集まりみたいだけど。

幼稚園児も楽しいもんね。

## 幼稚園児の先生

「はい、今日はこのお兄ちゃんと仲良くしてねー」

「はじめまして、桐矢です。よろしく願いします」

ぺこりと頭を下げ、はにかむように笑ったそいつはどこかで見たことあるような顔で・・・

「ちょ、ちよつと！きりちゃん！！桐矢だって！！モデルの！！」

「あーどうりで見たことあると思ったら」

あたし的には中の上ね。兄貴は顔だけならきつと日本一よ。でもあの変態だから惜しくも人目にはさせないけど。

桐矢ってやつもモデルだけあって顔はもちろんのこと、背は高いしお肌ツルツル。隣のこのみて子が興奮しながらあたしを揺さぶるのも無理ないわね。今日からあなたはゆさぶりっ子よ、決定。

「きりちゃんなんでそんなに冷静なの？！ここは今から桐矢様という宝をめぐって激しい戦いが始まるのよ？！戦場よ？！ジハードよ！？」

「生憎あたしは無宗教なの。聖戦って言ったってただのテロよ」

「わかった。私としては少しでもライバルは抹殺したかったから都合がいいわ」

じゃ、と言つて早速ゆさぶりっ子は桐矢に群がるハイエナの一味となり果てたわ。桐矢は困つたように「動けないよ」と笑いながら言つてるけど、そもそもスーパームデルがなんで幼稚園に？先生にでもなりたいのかしら？さわやかな顔してロリコン？小児性愛者？適材適所つて言葉があるでしょ。あたしにしたらこんなガキ相手するよりか、半裸のお姉さまにひざまずいたりひざまずかせたりしたほうがいろいろ豊かになりそうなものを。人の趣味ってわからないわね。

「きりちゃん、だっけ？」

声が出たかと思つたら、そこには満面の笑みの桐矢が中腰でいた。どうやら他の女をどうにか話術で押さえ込み、あたしに話し掛けたようね。話術・・・だけよね？なんか顔が赤いわよ？！なんか「ほつぺた一生洗わない」なんてふざけたこと言ってるわよゆさぶりっ子！ゆさぶりっ子だけじゃないような気がするのは勘違いよね？！勘違いと信じたい！！

「君だけ一人で遊んでるね、どうしたの？」

「別に。この時間をどう使おうとあたしの勝手よ」

「ははっ、それもそうだね。でも」

俺きりちゃんと遊びたいよ、と・・・

「きゃー!!」

「暴れないで！落っこちちゃうよ！」

あたしを、楊貴妃さえもうらやむ美貌を持ったあたしを、桐矢は抱き上げた！抱き上げやがったのよ!!

「あ、あんた何がしたいの?!誘拐罪で訴えるわよ!!」

「そうだなーきりちゃんすつごくかわいいからさらっちゃいたいよ」

いやー！桐矢様ー！あたしもー！なんて叫び声が随分下から聞こえる。そつとのぞくと床はずっと遠くて少しだけめまいがしたわ。

「あれ？きりちゃんもしかして高所恐怖症？」

「うつうつるさい!!あたしが高い場所を恐れてるとでもいいの?!無礼千万ね!!」

桐矢の口元が歪んで、あたしは後悔した。

今あたしはいわゆるお姫様抱っこをされていて、ちょうど桐矢の胸あたりに位置している。それがゆっくりと上げられ、綺麗な顔がどんどん近づいた。でも今では恐怖にしかない。その満面の笑みが意味することは、だいたい想像がついたから。

「……んじゃいくよ?」

瞬間、心臓だけが取り残された。背中と足にあった支えは消え、あ  
たしは絶叫した。

「いや――――！！！！！！」

死ぬ！死ぬ！！あたし死んじゃう！！まだやりたいことあるのに！  
！二桁も生きてないのに！！

「つと」

大丈夫？と笑う桐矢。

「・・・れない」

「何？聞こえなかったからもう一回いいかな？」

信じられない信じられない信じられない信じられない信じられない  
！！！！！！

「この腐れ外道がああああ！！！！」  
「ぐはっ？！」

まさか、想像はしたけど本気でするなんて。しかもこのあたしに、クレオパトラさえもうらやむ美貌を持ったこのあたしに恐怖を与え、さらに笑うなんて！！半泣を見て楽しむだなんて！！

股間をおさえ冷や汗を流し、金魚のように口をパクパクさせている桐矢に同情なんて微塵も沸かない。これは当然の報いよ。もちろん手加減なんてしてない。あたしの精一杯の力を出し切ってやったわ。

「しばらくの間生き地獄を味わうがいいわ！生まれてきたことを後悔しなさい！！」

あたしが背を向けると、それまでぽかんとしていた女子が桐矢に群がった。

「桐矢様？！なんとおいたわしや・・・」

「大事なお体を・・・輕輕しくあんなことをするものではありません」

「ここはもうかまいません、病院に行かれたほうが」

あなたたち、本当に幼稚園児？最近の幼稚園児にしてはかなりの教養を身につけてるようね。でもね、客観的に見てみなさい。そいつは明らかに悪人よ、極悪人。あたしを・・・よくもあたしに辱めを！！もつとあたしを労わりなさいよ！！

「待ってくれ、きりちゃん」

今一番聞きたくない声。でも無視ができなかった。何しろ目の前に女の壁ができていたから。

「お願い！話だけでも聞いてあげて！」

「悪いわね、今世紀最大の怒りで制御できない状態なの。あたし今度こそ完璧に完全に」

潰しちゃう。

冗談なんかじゃないわよ。あたしの体重なんてたかが知れてるんだから。もう二、三度踏み潰してすり潰してやる。

でもそれでも話し掛けようと立ち上がる桐矢。天晴れというかなんというか。その勇気だけは認めてあげようかしら。

「ごめん・・・本当にごめん。きりちゃんがかわいくて・・・ごめん！」

土下座をする桐矢に女どもは号泣。すばらしいわ！男らしいわ！なんて賞賛が聞こえる。

「・・・これに懲りたら二度こんなことはしないことね。女を大事にできない男なんてただのくそよ」

それだけ言つと目の前の壁は二つに割れた。さながらモーゼの海割りね。

世の中にはこんな男もいるのね。人生勉強になつたわ。でも二度とこんな男にはめぐり合いたくない・・・って、もうすでに変態が兄である時点である意味あたしの人生は波乱万丈ね。ああ、かわいそうなあたし。

「待つて聞いてくれ！俺きりちゃんが好きなんだ！！」

何を言い出すかと思いきや。

「もう君しかいない！俺の心をこんなに掴んで離さないのは初めてだ！！あの容赦ない蹴り、見事すぎたよ！！」

やっぱりあたしの周辺には変人しかいないのね。股間を蹴られて惚れるってどうよ？馬鹿馬鹿しい。変態は兄貴だけで十分よ。

「先生、あたし早退します」

「え、ええ、ああ、んじゃお兄さん呼ぶ？電話しましょうか？無理なら電報でも」

「お気遣いなく、タクシーで帰りますから」

一刻も早くこの場から立ち去らないと病気にでもなりそうだわ。

「待つて!!きりちゃん待つて!!」

「桐矢様?!どういうことですか?!」

「私のこと好きって言ったのに!」

「違うわよ、あたしよ!」

「鏡見てから言いなさい、私に決まってるでしょ!」

「きりちゃん!!」

幼稚園児も気が抜けないわね。

## 幼稚園児の運動会

ついにやってきた、今日という日が。

「えー季節外れなんて苦情は受け付けませんー。えー保護者の皆様、平日にもかかわらずお集まりいただきてまことにありがとうございますーますー」

季節外れ、しかも平日だなんて兄貴にはまったく関係ない。やつはいつどんな日になっても来るから。そして・・・

「きりいいー！頑張れー！ー！お兄ちゃんは見てるぞー！ー！きりちゃんしか見てないぞー！ー！」

ああ・・・もう・・・何を言っても無駄なのはわかってるけど。まだ何も始まってないから！ラジオ体操さえも！っーか園長先生まだ話してるから！！

「ではプログラム1番ーラジオ体操ー」

スルー？！いいの？！いくら保護者だからって何してもいいわけじゃないでしょ！追い出しなさいよ！その変態を！！

「うおー！ー！！華麗だああ！！その腕の伸び！足の開き具合！  
！最高だよー！ー！！さすが我が妹ー！ー！！」

嫁にいくなんて言わないでくれー！．．．って、誰かあいつを宇宙に飛ばして。きっと真空中でも兄貴なら大丈夫だから。早く地球から追い出して！！

「きりちゃん．．．あれが噂のお兄様だよね？！」

「さすが！破天荒でいらっしやる！ー！！」

久しぶりのフランスぼうやとカメモシね．．．でもね、あれはただの変態。

「今日の最後のリレー．．．僕の勇敢な様を見もらって、きりちゃんのお兄様に認めてもらうチャンス！ー！！」

「ふっ、わかってないな。運動会の真の見せ場は借り物競争！僕はコーンを4つ重ねてゴールテープを1番に切ってやる！ただ走るだなんてカメモシでもできるね！」

カ、カメモシ．．．筋金入りなの？カメモシにどんな愛を見出したの？というか借り物競争って紙めくって書かれてる物を探して持って走るんでしょ？なんでコーン4つって宣言しちゃってんの？コーンにどんな魅力があるの？っーかカンニングって時点でアウトよ！腐ってるわよその根性！

「わかってないな、バトンとともにつながる思い、それこそが美しい友情！お兄様は感動せずにはいられないだろうな！僕は1番で受け取り、1つめのコーナーを曲がった瞬間にこける！そして見事な逆転優勝！！ま、アンカーではないけどね！」

阿呆なの？フランスぼうやは阿呆なの？自作自演？しかもアンカーじゃないのに逆転優勝って誰に何託してんのよ。託される方の身にもなりなさいよ。しかも最初に兄貴は宣言しちゃってるわよ、あたし以外見てないって変態宣言を。

「はい、きりちゃんたちラジオ体操終わったから自分たちの場所に戻るうねー」

「ふっ、とりあえずこの場は引き分けということだ」

「いいだろう、決着はリレーだ！」

「借り物つつつてんだろ！」

ああ・・・どうしてあたしの周りってこう恥ずかしいやつばかりなのかしら。

こうも揃いも揃って阿呆ばかり・・・だから日本の子どもの学力は低下してんのね。なんなのゆとり教育って？なんか成果あったの？言ってみなさいよ！どんな成果があったのよ！

昔はね、日本人は勤勉だったのよ。だからみなさいよ、車なんて世界進出よ？高級品よ？たわしも作ってたってすばらしいじゃない！たわしが無い世界なんて考えられないわ。たわしがあるからあのフラ

イパンにこびりついた汚れも取れるし、兄貴を起こすときに役立つのよ！

「きりちゃん！僕の勇姿を見ていてくれー！」

なんだかんだ借り物競争？まーせいせい頑張ることね、カメモシ。

「くそがきー！！俺のきりちゃんに何アピールしてんだー！！」

「お兄さん！見ていてください！見事コーン4つを持って完走してみせますー！！」

「馬鹿言つてんじゃねー！コーン持ったぐらいで威張るなああー！」

「ご心配なく！コーンには種も仕掛けもございませんからー！！」

なんだろう・・・はじめて兄貴が少しだけマシに見えたような・・・でも気のせいね、うん。っていうかコーンになんの仕掛けができるの？

そして始まってみたら・・・カメモシは走り出した瞬間に足をもつれさせ・・・最後に残った紙を見て愕然・・・本部にいったかと思うと、手にしたのは輪ゴム・・・輪ゴム。もう、持ってるのか持っていないのかわからないというか意味ない感じね。ああ・・・カメモシが見るはずの紙・・・ゆさぶりっ子が手にしたようね、かわいそうに。コーン4つって何馬鹿な物渡してんのよ。先生も気づきなさいよ。明らかに無理そう・・・でもないわね、1着のようね。輪ゴムのカメモシが最後って・・・ありえない。

「ざつまーみるおおー！きりちゃんに好かれようなんて100年早いわー！俺ときりちゃんの愛に踏み込めるやつなんてこの世にはいないいいー！」

「くっ・・・まだまだだったようですね・・・ここはいったん身を引きます。しかし！必ず舞い戻ってきますー！」

兄貴・・・一応カメモシの両親もいるのよ、自重しなさい。訴えられるわよ。っていうか黙れ！

「えーマイクテスト、マイクテストーお昼休みー再集合は13:00  
-マイクテストー」

何重要事項をマイクテストに使ってんのよ園長！保護者ばかんとしてるわよ！

「きりちゃーーん！！お昼休みだつてー！早く早く、1秒でも一緒にいたいよー」

「・・・気持ち悪いよ？」

「愛だよ、愛。むしろ澄み渡ってるよお兄ちゃんの心は」

「ああ・・・そう。そうだと思つてなさい」

「っ、冷たい！今日はきりちゃんのために重箱詰め放題ーお兄ちゃんの愛はいつまでもースペシャル八段重ねを丹精こめて作ってきたのにー！」

「八段も作つてどうすんのよ！食材の無駄よ！このノンエコ兄貴ー！」

「だって未広がり・・・」

「うわっ、一段目カレー?!」

「さあ見てくれ!!!一段目はカレー!そして二段目はうどんさ!三段目はグラタンで四段目はヨーグルト、五段目はうな重で六段目はフルーツで七段目は白ご飯で八段目はなんと!」

「・・・」

「驚いただろう!見てのとおりカレーさ!!!」

あたしたちの周り一帯に異臭が漂っているのは気のせいではないわよね。ああ、どうして兄貴は・・・兄貴は阿呆なの?会社は大丈夫なの?こんな調子で会社はやっていけるの?むしろ兄貴の人生このままでいいの?

「さあ!食べて食べて!ただし自信があるのは一段目と八段目さ!」

「・・・カレーだけ?米ぐらい炊けるでしょ」

「今日は失敗しちゃってさ、おかゆになっちゃたよ」

「・・・」

「ヨーグルトも砂糖入れようかと思って味の素入れちゃって、なんていうかえぐい?」

「・・・」

「うどんとグラタンとうな重に関しては目も当てられない感じで」

「・・・」

「フルーツは多分食べれない部分の方が圧倒的だね」

「・・・」

「でも大丈夫!毒は入っていないから!ただちよつとおいしくないっていうか悪く言えばまずいっていうか!そんだけ!」

「・・・」

「さあ!どんどん食べてね!」

兄貴の料理は破滅的だとは思ってたけど・・・これは酷いわ。言葉が出ない・・・からとりあえずカレーを食べて女子トイレにこもることにするわ。まだカレーは人の食べ物だから。

「きりちゃんトイレ？早く帰ってきてねー」

残り45分、みっちりトイレにこもってやるわ。ごめんね兄貴。でも大丈夫よ、ここでいったん切るから。次に会うときはもう最終種目のリレーよ。

だらだら長いのってお互い疲れるわね。

## 幼稚園児の続・運動会

「さああ始まりました！！次は最終種目！！クラス別対抗リレーだー！！みんな張り切って走ってちょうだい！先生に、保護者に、この空間に感動と勇気と青春を与えてくれることを切に願い、精一杯応援しながらちよつと賭け事するからー！！」

そこかい、一体誰にいくら賭けてんのよ。

「たかちゃんーん！！絶対1位になつてねー！先生信じてるー！！」  
「まさとくーん！！1位になったら遊園地連れてってあげるわよー！！」  
「何も考えずに走れー！無心だー！！そしてたらきつと神様はよつちちゃんの味方だー！！」

ああ・・・大人つて。

「きりちゃんーん！！！！ん！！惑わされるなー！！お兄ちゃん  
はきりちゃんにちゃんと賭けてるからー！！」

「便乗してんじやないわよ！さばくわよ！家に帰ったら解体ショー  
よー！！」

「ちよ、ちよつとだけいいかもー！！」

「だああああ！帰れー！！」

もじもじしながら頬を赤らめる兄貴。兄貴、さすがにあたし本気で引いたわよ。

「よっしゃああー！ではレース・・・じゃなくて競技を始めたいと思いますー！！まずは選手入場ー！！」

レースって言っちゃってるわ、あの人。あたしたちが馬にでも見えるのかしら。こんな大人たちに管理されてるあたしたちってこのままの生活でいいのかしら？正常な精神と肉体を得ることはできるの？そもそもここにいる人間の中にあたし以外でまともなのはいるのかしら？ああ・・・だから内閣はごたごたで保険会社の株価は暴落するのよ。

「さくら組、清水孝也くん！彼のご両親はともに元アスリート！一番の期待の星だー！！」

誇らしげに入場するけど、両親がであってあんたにその遺伝子が受け継がれてるのは誰にもわかりやしないわよ。でもよかったわね、一番の期待の星だって。今後そんな期待を背負うことがないかもしれないから今のうちに堪能しときなさい。

「もも組、内藤正人くん！彼は幼稚園児にしてフラワーアレンジメントの資格を持っているつわものだー！ちなみに先生も賭けてるからしっかり走ってー！むしろ勝ってくれないと先生路頭に迷うわー！！」

花を愛でるのはとても優雅で気品溢れるわね。でも幼稚園児で・・・資格・・・とれるのかしら・・・っと、ここは突っ込んでもしようがないわね。至極無駄な行為よ。検索なんてしても無意味ね。この世界の神はとくに狂っているんだから！だから先生、路頭に迷う前にお金は返してもらいなさい。足を洗って真つ当な人生を送って。

「うめ組、高野与四朗くーん！彼の特技は将棋！オセロでは彼に敵う者はいない程の頭脳の持ち主だー！！果たしてその頭脳をどう使うのが見所だー！！」

先生、リレーは確かに少なからず戦略がいるわ。でもね、とりあえずは運動能力で選手選びなさい。将棋もオセロも野外で開催できても、基本的には激しい運動は皆無！むしろ禁止！！

「そして唯一の女の子、たけのこ組きりちゃーん！フルネームはお兄さんたつての希望で伏せとくわよー！」

そう簡単にあたしの偉大なる名前を叫ばれてたまりますか・・・って、あたしも馬だったのね・・・ああ・・・忘れてたわ・・・本当・・・むなしい。

「きりちゃーん！心配しなくていいからー！いざとなったらお兄ちゃんが担いであげるからねー！」

もはや競技ですらないわよ。保護者参加の騎馬戦および玉転がしは終了済みよ。

「ここでお知らせよー！残りの子には10円単位でしか賭けられなかったから本日はこの4人で戦ってもらいますー！残念だけどみんなの勇姿は先生の偽りの記憶として後生大事に守っていくわー！！」

もう、リレーですら、ないのね、先生。

結果的には、あたしが勝ったわ。あえて詳細を語らないのは意味があるのよ、深く考えないで。ただ要点をまとめると、スタート直後に高野転倒により負傷、離脱。清水は第一コーナーでまさかの足がつるといふハプニングに見舞われ離脱。あたしが内藤に遅れ始めるとどこからともなく兄貴が現れ、強引に抱え込み逆転ゴール。

先生・・・あたし、お金の貸し借りはしない主義なの。残念だけど、どうにかこの苦難を乗り越えてもう一度心からの笑顔を見せてね。

「これで・・・私主催、だれが1位だ金持ちだ大会は・・・終了します・・・と、同時に運動会閉会式も行いたいと思います。みなさん・・・背後に気をつけながら持ち場に戻ってください」

どんよりとした空気の中に混ざる勝利の声は案外多くて、あたしの  
人氣が知れたわね。でも・・・賭けの対象ってのが気に障るわ。あ  
とで兄貴に全部回収させてなかったことにしなくちゃ。

閉会式もすんで、兄貴と帰る道。兄貴はうつきつきで・・・氣味が  
悪い。

「いやー、さすがきりちゃんだね！お兄ちゃん鼻が高いよ！ピノキ  
オなんて目じゃない！」

「そりゃそうね、あれは嘘をつくと伸びるはずだから。お兄ちゃん  
にはもってこいの鼻ね」

「コンプレックスとして扱わないで！！お兄ちゃん純粹に喜んでる  
だけだよー！！」

「純粹？とんだお笑い話ね。お兄ちゃんが純粹っていうんならあた  
し家を出るから」

「違いますー！ちよつとした冗談ですー！お兄ちゃん賭けとか大っ  
嫌いだからー！勇敢な戦士に無駄に手を出したのも大恥だってわか  
ってるからー！！」

「わかつてるならいいわ、後の処理はよろしく」

「はい！命に代えてもー！！」

将来はもつと健全な運動会に参加したいものね。

## 幼稚園児の怒り

これは・・・これは一体どうゆうことなの？！

「あ、きりちゃんおかえり〜」

どうして我が家に

「こんにちは、きりちゃん」

ロリコンドMナルシスト桐矢がいるのおおおおおお？！？！

「な、な、な」

「紹介しますね、我が愚弟桐矢です」

「姉さん紹介なんて不必要だよ、俺たちの愛はそんな次元じゃないんだから」

まさか、美保さんの弟が・・・このあたしを弄んだあげく小馬鹿にし、股間を蹴られて目覚めた自称素敵王子様気取りの変態桐矢だなんて！！！！

どうゆうこと？！これは誰の陰謀なの！！！！

「くおるあああ！！お前生言つてんじゃねえよおお！！！」

「兄さん、あまり大声出していると迷惑になりますよ。というか迷惑です。むしろ消えてください」

「桐矢、そうしたら自動的にあなたも抹消されるわよ？」

「俺はきりちゃんを置いていけないよ、丁重にお断りする」

「どさくさに粉れて兄さんとか呼ぶなあああ！！！！つーかお前らはどうやって入ってきやがったああああ！！！！！！」

神は・・・この世にはいないのね。

所詮人間が作り出した妄想なのよ、虚言なのよ、幻想なのよ、革命家の思い違いなのよ、フランススコは阿呆なのよ。

何もかも仕組まれてんのよ！！！！

誰が？！いつ？！どこで？！見たつてのよ！連れてきなさいよ！もしいるつてのなら私が成敗してやるわ！！！！

「きりちゃん、結婚式は教会でいいよね？あ、神前もいいけどやっぱりドレスが映えるよね」

「当たり前だろう！きりは何だつて着こなす！そりゃあドレスでも白無垢でもどんとこいだ！」

「じゃあ私は白無垢で」

「何言つてんの？！お前は一生赤の他人だし白無垢なんて着たら真っ黒になるぞ！！」

「姉さん、兄さんは純粋な白より情熱の赤が好みらしいよ」

「あら、2日前までは白が好きだつて情報が入ってたのに」

「情報？！まだやつてんの？！いい加減法的手段にでるよ？！」

「照れないでください、ちゃんと真っ赤なドレスを着てあげますか

ら」

「どうしてそんな上から目線なんだ?!」

「きりちゃんはマーメイドタイプが色っぽくてたままないなー踏みたい」

なんでこんなことになってしまったのかしら。

どうしてここには変態しか集まらないのかしら。

いつになったらあたしは安らげるのかしら。

「静粛にiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!」

この殺意は誰に止められるかしら。

「少しは黙りなさい!!! さっきから聞いてればそれぞれ好き放題! あんたたちは人様の平穏な暮らしを、いや日本の、世界の平和を脅かして! 結婚?! 女子の結婚は16歳以上と法的に決まっている! だいたい誰がそんな変態と結婚するなんて言った?! 変態はお兄ちゃんです! 十分よ! むしろ手に余る! ていうかもつと遠慮しなさい! 親しき仲にも礼儀あり! これ基本! それぞれの座右の銘にでもしておきなさい! 今後一切人に迷惑をかけるのはやめなさい! あたしのために! 地球のために! 宇宙のために! 未来の子どもにくだらない歴史を残すのは今生きているあたしが恥ずかしい! 大人として責任ある行動をとって社会に尽くしなさい! いい?! わかったわね! これ以上やるってんなら受けてたつわよ! でもその時は覚悟することね! 今の85倍は喋るわよ!」

「え、あ、きりちゃ」

「意義を唱える者は?!」

「いません!」

「同じく!」

「右に同じ!」

「よろしい!それでは以上!解散!」

「イエッサー!!!」

ようやくみんな散っていったわ。

あたしの殺意もかなり納まってきたし・・・よくやったわ、本当。

若干美保さんの顔色が悪くて兄貴が液体にまみれてて桐矢は頬を赤らめていたけど問題ないわよね。

幼稚園児も怒ってみるもんね。

## 幼稚園児の遠足

「みんなー今日は履き慣れた靴でバスに乗ったかなー？おやつも250円までだったよねー約束はちゃんと守れたかなー？」

そう、今日は何を隠そう遠足の日。日ごろの行いがいいのか、雲ひとつない晴天に恵まれあたしたちは意気揚揚とバスに乗り込んだ。

そしてとたんに小競り合いは始まるの。

「どけよ、きりちゃんの横は僕なんだよ」

「そんなこと誰が決めたんだよ、お前は首相か？大統領か？」

「はっ！お前も所詮は子どもだな！大統領だったらなんでも言うこと聞くのかよ」

「屁理屈言つな、もののたとえてのがわかんないの？」

「お前のたとえてそんなもんなんだ？どうせならチエジウとか言ってみろよ」

「何？非国民にでもなったの？チエジウとか外国の血入れてんじゃないよ」

「これだから現代鎖国略して引きこもりは。いまどき流行らないよ？それとも何？独自の文化でも広げたいの？」

「むしろきりちゃんと一生愛の巣で引きこもりたいくらいだよ」

「だよね、気があうね」

「やっぱ持つべきものは友達だよ」

「うん、でもライバルだから。負けないよ」

「僕こそ」

・・・なんだろう、くだらないけどこの疎外感。  
どうしよう、つつこみ・・・めんどくさいから要点だけまとめようかしら。

「きりちゃんどうしたの？疲れてるよ？」

「いくらかったるいからってはじめからやる気がなきゃ楽しいものも楽しくならないよ？」

「あ、おやつは僕のいかそーめんをあげるよ。まー10割いかそーめんだけどね」

「全いかかよ！面白い！全いか！」

「やめてよ、照れる」

・・・なんだろう、沸き立つこの怒り。

きり、落ち着くのよ。ただ怒鳴ったってこいつらには理解する場所がないの。

冷静に、あくまで冷静にいくのよ。

「二人とも」

「何？」

「どうしたの？」

「心して聞きなさい」

静かに・・・優しく・・・

なんて

無理。

「人が黙って聞いてればさっきから何？何がしたいのあんたたちは？大統領？チエジウ？首相はどこにいったのよ！あんたたちは曲がりなりにも日本国民でしょうが！ここはね、日本にはね、大統領はいないのよ。もっと太郎を応援しなさいよ！太郎だって必死なんだから！漢字読めなくなっただって首相なんだから！総理大臣なんだから！それにもうひとつ。あたしはいかそーめんが大嫌いなよ！聞いているだけで窓から投げ捨ててやりたくないわね！さぞかしバス内の空気が薄汚れているでしょうよ！」

せいぜいおびえてるがいいわ。あたしの周辺で無意味でまるで内容がない争いは不愉快極まりないわ。しかも最終的に戦友みたいな関係になってんじゃないわよ。

ていうかおやつの全いかって何よ。面白いとでも思ってたのかしら？残念だけど、売れない芸人の一発芸以下ってところね！

「・・・えゝみんな？どうしたのかな？おなか痛いのかな？顔が真っ青だよ？」

「先生も・・・エチケツト袋満タンだよ・・・」

「先生は悟りの境地に入ったから平気です」

「さすが・・・伊達に30年生きてないね」

「やすくん、帰りは徒歩決定」

「あれがうわさの職権乱用・・・」

うなだれているのはやすくんだけじゃない・・・けど誰のせいかしらね。まったく、KYもいいところね！

それからそこら辺の山に登ってお弁当。お弁当後、景色を見ていると思わせ皆瞑想しているかの如く微動だにしない。そして無言のままおやつタイム。

全員、いかそーめんを頂上から投げ捨てていったわ。フランスぼうや、ひとつだけ隠し持っているのをちゃんと見ていたわよ。先生、バナナはおやつなのね。

そしてなぜかフランスぼうやが持ってきたトランプでば抜き。この青空、母なる大地をなめ切っているわ。

最後までジョーカーを持っていたのは帰りが徒歩決定のやすくん。今日はついてなかったわね。大丈夫、幼稚園児も足の短さを除けば持久力はあなたの身内（年寄りに限り）以上はあるはずよ。

そんなこんなで遠足は終了したわ。大きなわだかまりを残して。

「きりちゃん、今日の遠足どうだったー？」

「・・・」

「きりちゃんー？」

「よく考えたらあたしが大声だしからよね・・・本当、KY」

「きりちゃん？！急に何言ってるの？！」

「ほつといてよ、それにKYなんて普通でしょ」

「普通？！破廉恥だって！よく考え付いたなって感じだよ！」

「・・・お兄ちゃん、KYが何かわかってるの？」

「狂おしいほど揺らめいて？」

「・・・」

「無言?! 無言って結構痛いんだよ! 罵倒してくれたほうがお兄ちゃんもうれ・・・待って! 待ってきりちゃんんんん!!!」

幼稚園児も休息と反省が必要ね。

## 番外編 お兄ちゃん秘密

みんな元気かなっ?!

お兄ちゃんはきりちゃんと毎日一つ屋根の下だと思っただけで生きる喜びを感じてるよ!

「加藤さん、この書類今日中によろしくお願いします」  
「わかりました」

「あ、山本さん、今日の接待は私も行くことになったので」

「主任が一緒だと心強いです!」

「ははっ、邪魔にならないようおとなしくしておくよ」

毎日5時きっかりに仕事を終わらせる。なんてったってきりちゃんが! 愛しのきりちゃんが! 「きり寂しかったの! お兄ちゃん抱っこして! ちゅーして!」なんて待ってるに違いないから! 言われたことはないけど!!

「主任、この後お食事にでも」

「ごめんね、妹を迎えに行かないといけないんだ」

「それは残念です・・・」

「代わりに今度お昼ごちそうするから、それで許して」

「そ、そんな! お昼ご一緒させていただけでうれしいです! ありがとうございます!」

「別に俺ごときに緊張しなくていいよ。じゃあ後よろしく願います」

「はい、お疲れ様でした!」

5時に仕事を終わらせるといっても、3秒前にはすでに準備は整っている。たとえ仕事が残っていても、優秀な部下たちが我先にと言わんばかりに手伝ってくれる。これはきつと俺の類まれなる能力と人望だな、うん。

「はあ……主任……かつこいい」

「あなたも主任に惚れたのー？」

「あなたもって……もしかしてこの部署の女性ってほとんど主任に惚れてんですか?!」

「この部署っていうかこの会社ごとあの主任にメロメロなのよね、あ、メロメロって死語かしら？」

「この会社ごと……」

「ね、メロメロって死語かしらね？」

きりちゃんの通う幼稚園の保育時間はなんと9時から5時までというハイパーロング。土下座する覚悟で頼みに行ったら二つ返事でOKをもらった。

まさしく俺ときりちゃんの愛が勝った瞬間だ！

もう会社帰り兼お迎えはうつきさのるるん以外の何物でもない。きりちゃんに8時間ぶりに会えると思っただけでよだれものだ。血が滾る!!

「きりちゃん、最近お兄さんに彼女できたんだってねー？」

「ぶたの小牧先生……そうですね、はつきり言って嫁同然ですが」

「ぶ・た・ぐ・み・の、小牧先生ね……って！嫁？！」

「はい、その弟はとんでもない外道ですが……」

「外道つてげ・ぼ・く、がいいな」

「で、でたあ!!」

「きりちゃん?! 誰なの?! 誰がお兄さんの嫁なの?!」

「きりちゃん！逃げないでー！どうせなら追いかけてほしいー！  
ていうか踏んでー！」

「変態なんて兄貴だけで十分よおお！！！」

ああ……きりちゃんの泣き顔だけでお兄ちゃんはも・だ・え・る・よ！

「便乗してんじゃないわよ!! 帰るわよ! まったく……お兄ちゃんの変態菌撒き散らすから!!」

「お兄ちゃんもはや病原菌扱い?!」

「加熱処理してあげてもいいわよ」

「おいどんまだ生きていごわす！」

「なんのまね？つまらない人間がつまらないことしてんじゃないわよ！」

「つ、つまらない人間……」

「いいな、お兄さん……罵られて」

「きひいいい？！まだいる！ついてきてる！ストーカー！」

「そっか……そうだね！そこに愛があるから！」

「そうそう、俺なんて最近踏まれてもないし蹴られてもないし．．．体が熱いです」

「変態変態変態変態……」

そう、きりちゃんの激しい言葉の裏には愛がいつぱいにこもっている。どんなに頭がよくてかわいくて気品があつて（以下省略）も、まだたつたの５歳。甘えたい時期に俺はあまりかまつてあげられない。本当は寂しがりやで泣き虫なはずなのに、いつも気を張っている。

まあ俺が頼りないってのも一理あるけど。

そんないい子は俺の幸せを祈ってくれている。ちよつと見当違いなところもあるけど、それさえもうれしくてたまらない。

もう一生一緒にいたい。お嫁さんなんてもつてのほか。なんでわざわざ他人にやらないといけないのか？ここまで大切に育ててきたのも、これから育てていくのもこの俺だ。絶対にお嫁さんになんてやらない！！！！

でも  
・  
・  
・

「ドレス姿は見たいよ！」

「は？もう溶けちゃえ溶けちゃえ！脳みそ溶けちゃえ！状態にでもなつた？」

「さすがきりちゃん5歳児なのにパチンコネタ！博識だね！」

「もう寝るね、付き合いきれない」

「んじゃ添い寝でも」

「変態」

「お、お兄ちゃんなんだからちよつとはいいでしょー!! お兄ちゃんだつてきりちゃんとの空白の時間を埋めたいー!!」

「大げさね、誰か記憶喪失にでもなったの？でもまあ今日ぐらいは・

- 
- 
- L

「よっしゃあああああ……！！！！！！！！！！」

「まだ言っていないのに何先走ってんのよ!!」

「でもいいんでしょ?! いいんでしょ?!?!!」

「まあ・・・一回ぐらいは・・・」

「お許しげっちゅー！今回はまだ意識ありオプション付きー！！！」  
「今回？！オプション？！」

「さあさあ、お兄ちゃんと夢の世界に行きましょうねー！」

「なんか・・・釈然としないわ・・・」

「ほらほらーさあさあー！」

きりちゃんのうとうととしてるときの！あの！表情！！！

たまらん！！！！！！！！！！

まあいつでもかわいいけどね、うん。一日中カメラ回しときたいぐらいだよ。

「きりちゃんなんか歌ってあげようか」

「いいわよ・・・黙って横にいなさいよ・・・」

「今日は甘えんぼだな～かわいっ！」

「黙れ」

「はい・・・」

もう今にも大きくてつぶらな瞳が閉じてしまいそうだ。

ああ・・・本当に俺は幸せだ。こんなにもかわいい妹をもてて・・・  
幸せだ。

両親が死んで二人つきりになったとき、自信はもちろんあったが不安もあった。本当にきりは満足か？ストレスや悲しみはないか？俺だけで笑ってくれるだろうか？

完璧にすべてを拭い去ることはできなくても、少しでも暖かい家族になれたら。

「お兄ちゃん・・・」

「ん？」

「今日家族の絵を書いたの・・・」

「そりゃきつと傑作ができたね、賞状もんだ」

「あたしと・・・お兄ちゃんと・・・母さん父さん・・・それにお  
ばあちゃんおじいちゃん・・・みんな大好きな家族・・・書いたよ・  
・・・」

「そうだね、みんな大好きな家族だね」

滅多に触らせてはもらえない、小さくて丸い頭を優しくなでた。ま  
だまだ小さい、かわいい女の子。

「お兄ちゃん・・・うれしい・・・こんなに家族いっぱい・・・幸  
せ・・・大好き・・・」

傲慢かもしれない。それでも。

「きり・・・大好きだよ・・・」

小さな女の子はこんなにも笑ってくれてる。俺に、幸せを与えてく  
れる。

その小さな体に、いったいどれだけの苦しみが詰まっていることだ

ろう。俺にはわからない。でもそんな小さな体は、いつだって俺を支えてくれている。どうやっても敵うはずもない。

だから守るよ。いや、そんなことのけても。俺を嫌いになったって好かれるにこしたことはないけど・・・っていうか嫌われるなんて考えたくない！

まあ守っていくとかいいながら、守られているのは俺だけ。

「おやすみ・・・明日も元気で楽しく過ごせますように」

俺だけの内緒のデコチューおまじない。

ばれたらとんでもないことになりそうだけど、絶対これだけはやめない！だってこれできりちゃん欠乏症を抑えてるって言っても過言じゃない！これをやめると言われたら俺は死ぬ！！

「さてと・・・かーさん、とーさん、きりちゃん眠ったよー。  
かわいすぎてマジで歯止めきかねー」

「やめなさいって、あんたが言ったら冗談に聞こえないわよ」

「でも分かるよーきりちゃんって世界遺産レベルだもんねー」

「だよなー、父さんとはそのみ分かり合えるよ」

「そののみ？！そのみなの？！」

「はいはい、今日もお疲れ様。しっかり守ってますからね」

「ありがと、母さん」

「俺も全身全霊できりを守ってるぜ！」

「うん・・・まあ・・・そうだね・・・確かに全身全霊だね・・・」

「なぜそんなに困った顔をする？！父は悲しいぞおー！！！」

「まあまあ、あなたがつまらない冗談を言うからですよ」

「つまらない・・・冗談・・・。っていうかきりはいつになったら俺たちのこと見てくれるんだ?！」

「きりちゃんはその基本的な幽霊などの類が苦手だから・・・無理かな?」

「無理・・・」

「しょうがないですよ、あの子あ見えて結構乙女ですから」

「乙女とか言うな!ぴったりなんだよ!」

「母さん・・・俺も寝るよ。なんかせつかくきりちゃんの寝顔で癒されたのに台無しで疲れたから・・・」

「お前もきりというバリケードがなかったら酷いな!」

「おやすみ、智史」

「おやすみ、母さん」

「ナチュラルスルーかよ!」

「だって無駄に長いし・・・」

「へーへー、どうせ俺はきりが心配で思わず守護霊なんかになっちゃった親ばかですよーだ」

「あなたここまできてすねないで・・・疲れるから」

「お、お前まで・・・!いいもん!俺きりをずっとずっと見守るもん!」

「じゃ解散ということ・・・」

「じゃーな!智史!」

「おやすみ、父さん」

きりには見えないが俺は両親が死んだ日から見えていた。

なんとなくきりちゃんに話してみたら「何言ってるの?阿呆なの?お兄ちゃんは阿呆なの?」とあほを阿呆と表現してしまうほど怖がつていたため、今ではきりちゃんが寝静まったときにだけ会話している。

死んだにもかかわらずテンションが高い父親の対処はかなり疲れる

が、どこかほっとしている。

俺たちは一人じゃない。誰かと必ずどこかでつながっている。たとえそれが、本人にはわからなくても。

でもいいんだ、その分しっかり俺が愛情を注いでいるからね！そりゃもう変態って連呼されるぐらいに！！！！

さて、明日もしっかり働きますか！

お兄ちゃんもやるときゃやりますよ！！

## 番外編 お兄ちゃん秘密（後書き）

ここにきてやっとお兄ちゃんの名前が出てきましたねー。

ついでに「さとし」って読みます・・・どうですかね。なんかこの兄貴、さ行の名前っぽくないですか・・・?!

っていうかこの変態に唯一さわやかさを求められるのはここしかないと思います。

ということ番外編でした。すっごく楽しかったです。みなさんにも楽しんでいただければ光栄です!!

それでは今後ともどうぞよろしく願いします。ありがとうございました!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0103e/>

---

幼稚園児も大変なんです

2010年10月21日21時51分発行